

# 川柳塔

昭和五十三年二月二十五日印刷  
昭和五十三年三月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷六一〇号



日川協加盟

No. 610

三月号

新緑の奥飛驒の里にロマンを求めて

## 川柳塔本社親睦吟行会 (予告)

(主催 川柳塔社)

スケジュール (バスツアー)

昭和53年5月13日(土) 大阪(長堀橋)駐車場3番  
ゲート)心斎橋の下20時発。

豊中20:20 | 小牧22:40 | 高山2:15 | 平湯峠3:  
20 | 乗鞍4:00 | にて御来光を仰ぐ5:40 | 福地温泉  
7:00 (朝食・露天風呂に入浴・小休止) 9:30 |  
上高地11:00 (散歩の旅) 13:30 | 福地温泉15:00  
▽福地温泉9:00 | 高山10:20 (市内にて朝市見物、  
屋台館等自由行動) 13:00 | 小牧16:40 | 吹田18:  
50 | 大阪19:20。(目出度解散)  
参加費(二万七千円)

●乗鞍岳二七四〇m 覺平 ●上高地大正池、上高地

●福地温泉 | 旅館孫九郎 | 檢造大浴場 | 大露天風呂  
飛驒の匠の手による囲炉裏、独特の飛驒作り。夕食  
は囲炉裏を囲んで、鮎、五平餅、鶏肉、野菜等を煎  
端に立てて地酒を酌む。朝食は香ばしい朴葉みその  
郷土料理。

●飛驒自然館 | 化石センター | 民族資料館 | 高地植物  
園。

●バスの都合で四五名で締切ります。

— 窓口 本社・板尾岳人



たのしさひろがるお買物



阪急

東横店  
西横店  
三軒市店  
南大塚店  
北大塚店  
大塚店  
池袋店  
有楽町線  
丸の内線  
山手線  
有楽町線  
丸の内線  
山手線

ヤングのための  
ガジュアルウエア

クラブウエア Kurabo fabrics  
ガジュアルウエア

倉敷紡績株式会社

## 衣食足って

私は数年来の行事のように、新春の三日間の解放された時間を利用して、以前一二度読んだことのある本をくり返えして読むことにしている。無作為に書棚から抜きとるのである。今年には松原泰道師の法句経入門だった。読み返えずという事は嬉しいものでそのたびに感銘する部分、言い換えると新しく傍線を引く部分が増えてくる。今度新しく傍線を引いた箇所には次の言葉がある。「現代人は衣食足って礼節を知るのでなく、衣食足って礼節を捨てたと申したい。戦後のうらぶれた日本人が物質的に恵まれた生活になつて、かつて身につけていた礼節をどこかへ忘れたか落とすかしてしまつた。礼節どころか人間性をも遺失したままです」とある。川柳は人間陶冶の詩だとすれば、松原氏のこの言葉が胸につきささる思いがする。謙談とか礼節を生活の基礎に堅持して居れば、係争や軋轢が避けられるように思えてならぬ。

快食快眠とかで初夢見失い

受験子のない三月の灯が軽い

孫が死んでもこんな明るい顔もあり

間の抜けた顔して痛いところにふれ

待ち兼ねた笑顔に映える神の智恵

中島生々庵

川柳塔三月号

座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

満開の絵ばかり花の種子袋

森田 カズエ

# 川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

衣食足って

中島生々庵 (1)

77年世相川柳考

本多 柳志 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(18) 清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮  
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫 (24)

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (30)

虚無僧の陶人

東野 大八 (22)

秀句鑑賞 (同人吟)

西尾 菜 (21)

(水煙抄)

高杉 鬼遊 (41)

愛染帖

橘高薫風選 (38)

日本のルーツ・幻の邪馬台国を求めて

西尾 菜 (26)

音のない世界に生きる

不二田一三夫 (44)

古川柳現代解釋法

香川 醉々 (46)

## 77年世相川柳考

本多 柳志

い 醫師税へ入れる手もなしメスもなし  
 ろ ローンまだすまぬに屋根が漏りはじめ  
 は ハイジャック金もち日本喧嘩せず  
 に 二〇〇海渚漁場の沙汰も金次第  
 ほ ボーナス早い目仕事遅い目公務員  
 へ ペテン師もサギ師も走る十二月  
 と 年の瀬も浮ぶ瀬もなし造船所  
 ち 中の中でくらしていますアンケート  
 り 理屈では負けて父権はゼロになり  
 め ぬけ道の攻防裁判ロッキード  
 る 類を以て集まり交番焼きに行き  
 お 往診もウラから来はる奈良の医者  
 わ 和歌山に住んで地震に驚かず  
 か 春日節丁度時間となりました  
 よ 余剰米混ぜてうどんが不味くなり  
 た 太路から神戸へ廻る風見鶏  
 れ 冷凍室はまだ大きくころがされ  
 そ 卒業はしたが背広はまだ着れず  
 つ 土踏まぬ人が米価を決めてくれ  
 な ネットシーかサメかわからぬまま沈め  
 な 長生きも政治のせいにする白書

新理事と初顔合わせの会	.....	(42)
檜谷漫柳還曆句会	.....	(48)
路郎選古川柳の味	.....	(55)
雅号ぶっちゃげばなし	.....	(53)
初歩教室	.....	(52)
大萬川柳「松」	.....	(54)
柳界展覧	.....	(56)
本社二月句会	.....	(58)
各地柳壇(佳句地10選)	.....	(62)
「女の子」	.....	(50)
一路集「祝言」	.....	(50)
「桃」	.....	(51)
編集後記	.....	(69)

座右の句  
地にかえるうれしさを舞うぼたん雪  
(恵二朗)

私 の 句  
過去のこと忘れて姑の背を流す  
小川 佐知子

らんランのもしやもしやへ人が混み  
むつはまず半身不随のまま浮び  
有珠山の灰をにげ出す宿浴衣  
の 農政は農家に米を作らさず  
を 押し売りと知らず困窮として迎え  
く 鯨尺保釈のように顔を見せ  
や やぶ医者は三十点入学かと疑われ  
ま まったなしやつと北京へ腰を上げ  
け 検査官自前でのんでくだを巻き  
ふ ブーツブーツ猫も杓子も大根も  
こ 公約は願望にする二枚舌  
え 円高く庶民はやせて秋深し  
て 天皇さまもご存じ王のホームラン  
あ 有田まで連れもて戻るコレラ菌  
さ サラ金の利子で自分の首をしめ  
き 教科書へ国歌は嫌な日教組  
ゆ ゆうれいに土地も売ります百貨店  
め 目減りする貯金の利子が又下り  
み ミニは目の毒か街から消えて行き  
し 叙勲記事みな人生のファイナル  
ひ 人質が戻れば金が惜しくなり  
も 戻し税妻には云えぬとこへ消え  
せ 千万長者の夢をはがきで予約させ  
す 筋書きの通りに決る委員長

# 川柳塔

## 中島生々庵選

八尾市 高杉 鬼遊

路次裏で三月を待つ植木鉢  
逢うて話せば感激が消えそうで

紅白の手綱で太郎の嫁が来る

山賊の宴に肉の値が高い

核家族五人囃子は寄りつかず

東大阪市 竹中 綾女

一月五日九時四十分肖二急性心不全で出直す  
物言わぬ夫へ何度も呼んで見る

転た寝の夫起こさぬ癖悔やまれて

ほどこしようないと無情に医師告げる

息子への電話をかける手が震る

今日からは寡婦の仲間になった我れ

島根県 堀江 正朗

年賀状僕も点字で書き添えて  
来年に続く時計のねじを巻く

人並みに晦日を僕も腕まくり

可愛がられる年寄りになるう晦日そは  
想像を消せば盲人骨ばかり

大阪市 河井 庸佑

勇退の椅子へ候補者多すぎる

先生とママの意見がくい違い

この辺で妥協する振り見せてみる

お互いにひっこみつかぬので弱り

押して引くその駆け引きを心得る

松江市 中川 晃男

おめでたい正月 下戸は蜜柑むく

テレビばかりニコニコしてるお正月

いいべべで子供を出して寝正月

腹立ててはならずなめられてはならず

親のしたとおりに失敗して育ち

島根県 堀江 芳子

正月さんもうお帰りが子らが去ぬ  
わが老後あの人この人に写して見  
湯豆腐も今日へ感謝の湯気をたて  
人知れぬ苦勞を生き甲斐かと思ふ  
優しさの足りないときの自己嫌悪

松江市 恒松 町 紅

日照権の下で底辺の子が遊び  
手を組んで街も長閑な初春の貌  
共稼ぎ妻もビールが少しいけ  
幸せな夫婦で同じカゼを病み  
やめられぬ酒だと酒が知っている

鳥取県 森 田 布 堂

お地藏を建てたその日に事故ひとつ  
電話では用が足せぬと汽車で来る  
成人式不況の中にはばたけり

離婚歴二回逮捕歴三回  
人口があふれお米の余る国

大阪市 河 野 君 子

披露宴中のひとりが沈んでいる  
また逢えることのみ想う花暦  
吊り橋を渡ったことない不仕合せ  
女の業の深さで寡婦の城揺らぐ  
わたくしの素顔に出合う午後

三時 八尾市 高 橋 夕 花

初詣でどこまでつづく白い道

七草に古い女の行事終え  
春の雪一期一会の傘を持つ  
おもい出を綺麗にしまふ京のまち  
人の世の裏の裏など見たくない

松江市 柳 楽 鶴 丸

ホットした時に ダウンした  
毎日が楽しい夫婦のデスカッション  
負ける事も立派に負ける事にする  
妻子へ今年もブレイキをたのみます  
不安のない生活があるから突っ走る

新宮市 大 矢 十 郎

取り欲が老けて放さぬ欲となり  
底に居る暮しへ病容赦せず  
ああラッシュみんな冥途へ旅の人  
一服が多い大工の話好き  
割勘へいいいよいよと笑う下戸

今治市 月 原 宵 明

石段を登るブーツが異国めき  
十円玉転げて消えてそれっきり  
旧道に茂るせい高アワダチ草  
大往生した葬列の笑い声  
戦いはこれからあつい茶がわたり

宇部市 平 田 実 男

午年雑感一句  
天駟けるより車引く馬でよし

共稼ぎ金で濟まない歪が出  
手をかけた菊がなんだか造花めき  
そつのない男自分を見失い  
有る振りをした一日の氣の疲れ

大阪市 神夏磯 道子

春の陽が小さな悩み捨てと云う  
準備した椅子が主役に大きすぎ  
四捨五入してそれからの話聞く  
穴道湖に鶴遊ぶ日の里帰り  
旅みやげ妻は相場をつけたがり

和歌山市 内芝 としよ

衣食住足って心をもて余す  
次の世をになう晴着の躰けとる  
頼り合いますがり合つて草のつる  
自惚れがちよっぴり潜んで可愛い娘  
ご利益を信じてきつい坂登る

宝塚市 傍島 静馬

金の無い紳士は載らぬ紳士録  
希望退職あてにされてるお人好し  
その奥を問われまごつく付焼又  
何氣のう序のように云う無心  
さまざまな人情に触れた長病い

尼崎市 黒川 紫香

都会から戻る便りへ炭を切る  
壁面に座して静かに錫を待つ

若僧の素足冷え冷え廊下擦る

城下町出石にて

宗鏡寺雪の重味を見せる松  
雪伏せて出石城趾は音もなし

倉敷市 水粉 千翁

日々好日箸の重さを確かめる  
父と子を酌ぐ盃はひとつです  
譲り合う道に袖摺り合うている  
釣銭の重さがわかる年の暮  
腕組んだ演技計算済である

堺市 高橋 千万子

あの人を立ち直らせたウソ一つ  
バラの香を思い切り嗅ぐうれしい日  
日記帖葉直に書いた日の憂い  
日の暮る早さをばやき米をとぐ  
ダイヤルの向うも風を引いた声

富田林市 岩田 美代

感情がむき出し今日のみぞれ雨  
寒いから悪友呼んでいる電話  
冬陽ころころ想い出を包み  
女三人くらしの所作でみかん剥く  
馬に羽つけて人間の神話

竹原市 森井 善居

土鍋から日々好日が煮こぼれる  
七人の敵は知らない隙を持つ



三枚目向きの自由な椅子がある  
木枯しを抜けたら阿呆になりそうな  
前を見ないでスランプだスランプだ

島根県

藤井明朗

春よ来い景気を連れて早くこい

男きらいの噂へ男寄ってくる

百寿まで生きる老いの春の酒

おたがいに同情してる寡婦と寡夫

(むらくも二五〇号となる)

二五〇号迎えきびしい夢の跡

今治市

越智一水

人間を光るメガネの奥に秘め

幸せな人幸せな愚痴を言う

わたしより不幸な人がよく笑い

駅伝の汗がテレビでよく匂い

往復ピンタうけて百姓死ぬという

大阪市

西森花村

床の間に千両こぼれし松の内

めでたさのサイズは年賀ハガキ程

人の行く道が見えないハイウェイ

見合写真写真うつりは悪いけど

湯上りのように子馬のさわやかさ

豊屋川市

宮尾あいき

娘にもろたこたつの故障で風邪を引き

風邪の奴私の体を越し

御年玉差額をつけてと兄不服  
福笹の鯛の目玉ににらまれる

竹中肖二様逝く

初句会おし鳥夫婦もう来ない

大阪市

金井文秋

天寿全うしじめじめせぬ涙

黒杵に貫録あつた頃の顔

気まぐれの賀状が来たり来なんだり

疲れてる頭が本を空回り

姑の孤独嫁には嫁の主義

倉敷市

小幡里風

倅は飛びこんできた青い鳥

本当の母はエプロン着けたとき

青春の暴走奈落がそこにある

骨のある父の小言へかしまり

両の手へ孫ぶらさげてみな笑い

島根県

小砂白汀

ケイトウの朱が気になるゴミ袋

見守ってやるのに時々泥をかけ

じゅうたんに一度触れたい土不踏

病葉で散らず枯れ葉で嬉々と舞い

一大事晴れ着もいらぬと言いだした

笠岡市

松本忠三

黙禱に薄目をあけている視界

小銭だけ持って鎮守へ初詣で

除夜の鐘御節料理の手を休め

居眠りも一役買った多数決

風呂敷の荷物は母に持たせて居

島根県 錦織 文子

日本髪女で暮らす三カ日

元日や子らが揃うた豊かさよ

ひび割れもかびも来ぬ間の餅のかず

日の丸を掲げれば日本美しい

天駆ける神馬へ似よや孫誕生

大阪市 川口 弘生

貸した方も反省してる除夜の鐘

形見分けの中から出て来た宝くじ

亡き母の思い出秘めている晴れ着

表彰する方が大きいリボンつけ

白い毛に生れて停年のない神馬

呉市 植田 英詩

小雪ちらちら春の序曲は土の中

人質になろう妻子が戻るなら

七色の虹弦となり雨の唄

遠慮なく頂きました酔いました

仄くるくる地球の汚染見てください

竹原市 山内 静水

元旦や捧げ奉らん師の一句

一列に並んで待って押し込まれ

忘れてた記念日嫁から息子から

はり紙では固く断り申し上げ  
すねている横顔しばし見とれてた

倉吉市 奥谷 弘朗

本心を試す意外な恋もあり

閑人と百姓の見る一万歩

都合よく忘れることも心得る

岸壁の母の強さのある日本

師の影を踏まぬ昔の遠いこと

岡山県 嘉数 千代香

今日生きるドラマが台本なしで開く

ベツトリと不況を浮べ川流る

諦めの風に消された土が哭く

揺れている心へ遮断機が降りる

うっぶんをつがえたままの矢が錆びる

青森市 工藤 甲吉

また節をふやして竹の几帳面

百姓の拳むなしく天を突く

デノミまで臥薪嘗胆一円貨

屁理窟になると大人を言い負かし

身ぶるいをして熱爛を急がせる

岡山市 時末 一灯

終着へ湧立つ連結器の叫び

一ひらの余裕社会鍋へ舞い

魂をゆさぶり雪の降りやまず

不況風ことさら寒椿の赤

出来すぎた話と気付く発車ベル

愛媛県 渡辺 曉 童

旅は道連れ 派手な角瓶  
五剣山なる けわしさを賞で  
めでたい席に はずされる歳  
金比羅さまの ファンに候  
講談なみの 筋書で行く

竹原市 鈴木 かつ子

人間の出会いあなたと共白毛  
ねぎ二本ぬいて夫婦の夕支度  
人生のシグナル青がみじかすぎ  
妻の知恵飲んでくるなと子に言わせ  
娘が三人色あざやかなお正月

大和郡山市 森田 カズエ

平和かもパチンコの玉弾く指  
誘われてつい速足となる師走  
友情へ一言妻にある意見  
人生のドラマ第二部第三部  
金蔓を掴かむ計画金が要り

大阪市 島田 雄 峯

無理したらあかんと話す足と腰  
写真帖我が青春の戦闘帽  
友の身に成って朗報語られず  
白菊の香りと成って寄り添いぬ  
妻や子のシゴキに耐えるちびた靴

伊勢神宮初詣

大阪市 本多 柳 志

玉砂利の神代へつづく音で踏み  
驚馬にまだ鞭打つ夢も寝正月  
酌ぎ合うて妻も嬉しい屠蘇の酔い  
置物の馬も跳ねてる午の春

漫柳君還曆

君よ炎えよまだ人生の二幕目

倉敷市 稲田 豊 作

積木の子やがては金を積むだろう  
風は緑という地に医師は居てくれず  
利に聡い男の会話から逃げる  
句の中へ亡妻にんまりと生きてくる  
年金が長生きしなよと励ました

大阪市 山川 阿 茶

元日を五階のビルにただ一人  
二次会へやけくそで行く忘年会  
運命の枯葉は踏まれるとこへ落ち  
いつも逢う人の来ていぬ墓詣り  
ちとお粗末八十歳の思惟の像

米子市 佐伯 越 子

無人駅蝶も飛び交い花も咲き  
帰省子の肩に雪降る山の駅  
うれしい日リズムが鳴って寝むらせず  
前だれの赤が目には沁む雪地蔵

過疎の里空氣がこわいほどに澄み

美禰市 安平次 弘道

さて何処に貼ろうかカレンダ一の裸婦

サラ金に質屋の暗さがない救い

堅物の裏面がのぞく花名刺

切札もなく停年を平社員

リモコンでテレビも俺も動かされ

富田林市 板尾 岳人

三月の山から見える母の櫛

三月の風は仇打ちなどしない

雪解けの水で三月峰洗う

山の絵のネクタイを買う三月だ

三月の雨は憎くして情死する

大阪市 不二田 一三夫

食べるか喋べるか どっちかにしろよキミ

警官が送るといふから怖わくなり

嘘をいう女 時には愛としゅうて

このごろまた神さまを変えている

産まれたてだから美人と云っておく

松江市 小林 孤呂二

松の内皿の数にも気を配り

保守的な町で白壁よく残し

盲腸ぐらいで良かったね御見舞

水仙の朝すがすがしい快復期

出雲市 原 独仙

お年玉速効孫が肩を揉む

顧問の座敬遠されたなと思う

新旧の良さをミックス嫁姑

生きるのが嫌やだと思ふ日の恐怖

縁起だるま片目のままで年を越し

寝める事も忘れぬ師匠の太い眉

奉射祭景氣を占う矢がふるえ

初孫の分まで賽銭はずんどく

藤井寺市 児島 与呂志

いろりの火雪の民話の中に入れ

幸福な手話のふたりに音がない

嘘ついて女が知ってる聞つおて

人並みの事をしてたら追い越され

大阪市 神谷 凡九郎

人間なんてそんなものだと思つて置く

何時かある別れと思いたくはない

死にたい人と死にたくない人とその生命

終らない生命だったら恐ろしい

堺市 藤井 一二三

初詣での列 善男の顔でいる

お神酒拝受巫女の袴に初春光る

末吉のみくじ信じてマイペース

無事二人ことほぐ初春を妻へ酌ぐ

大阪市 那須 鎮彦

駄馬の一生はテストされつづけ  
再起する道の向いへ陽が当り  
初詣で一番安い絵馬を買う

竹中肖二氏追悼

どっさりと宿題残こし旅の人

松原市 玉置 重人

自惚れている足元を掬われる  
開店の粗品撤き餌のように呉れ  
戦いの序曲目ざまし時計鳴る  
久方の友へはずんでゐる無口

鳥取市 佐々木 静 泉

祝父母金婚三句

子や孫もあやかり寿盃へ酒満たす  
苦節五十年その一節に俺もいる  
老父母の語りバラ色に染めてある  
雑布にもなれずくす屋に持ってかれ

和歌山市 垂井 千寿子

晴着から貧しい心を見てしまい  
元旦の窓にもゆれる千羽鶴  
背延びした自分が見えて来る鏡  
反省の数だけ除夜の鐘がなる

下関市 国弘 半休門

妥協して其後長寿にて候  
健康と云うお年寄筆で書く  
電線があるから凧がひっかかる

鍵の鈴盗まれる日は鳴るまいね

竹原市 小島 蘭 幸

少し勝気な女でもらい泣きもする  
トランプへ一対一となる夫婦  
ロマンなどないポケットに鍵ひとつ  
無精髭ぐずな男で寒がりて

和歌山市 若宮 武雄

眠ったら忘れる痛み寝つかせず  
目の前の札束俺を試して  
水仙の匂いの中の亡母を追い  
嘘のない自由欲しくて寝るとする

鳥取県 川崎 秋女

自惚れを羨ましいと思う日も  
ふんわりと糞虫冬をぶら下り  
嘘でいい医者よなおると言うてほし  
愛果てた女がたどるひとり旅

姫路市 梅谿庵 不 醉

行先を聞いて答えぬ友送る  
味ほめて二本三本と妻も酔い  
口下手が言うからあいつ信じよう  
不景気が先祖の墓を遠くする

泉大津市 村上 春 巳

苦労などおまへんやろと馬鹿にされ  
浜寺と言う海があったこのあたり  
天平の豊をゼット機がゆする

山焼の僧のくしゃみは闇に消え

倉敷市 松井俊風

子の悩み親の悩みとすれ違い

腹立ちの苦笑と知らず握手され

精検の結果へ重い刻流れ

木枯しのまだ生きてゐる吹き溜り

大阪市 中川滋雀

即席のおそばに届く除夜の鐘

初詣折り凍てつく石畳

神殿の灯りに記帖の手がこごえ

鞭をふる情の涙見てしまふ

枚方市 宮川珠笑

通夜更けて犬も小さく喪に服す

肩を揉む妻に脳天覗かれる

仮小屋のままで子育て終りそう

過去帳の次頁いつもあいてゐる

大阪市 天正千梢

地固ためになる喧嘩かも知れぬ

さもしさは下心が見えすぎる

大事なものを失いつつ忙しい忙しい

人生のステージアンコールありません

大阪市 西川誓二

都会と云う火宅で日々強わく生き

努力した手だ確かなもの掴もう

口惜しいことに欲の罫から抜け出せず

おのれを過信足元が浮いている

八尾市 香川酔々

松籟に古墳の美女は耳すます

反省のおとがい支え三が日

盃をうしろに隠す卑怯者

一枚の葉書に憎めない女

京都市 都倉求芽

春が来る当り前のことが嬉しくて

幕を引く役ばかりで生き残る

眠いのつもり枯木を邪魔がられ

酒好きの医者には頼りない下戸患者

和歌山市 西山幸

人を許して尖った風をまるくする

終らない話にしたい雑記帳

つよがりを言って喜劇をもちあげる

母だけが持つてる小さい古い独楽

西宮市 若林草右

不断着の鳩とめでたい初詣

吸物の蛤未練の貝柱

すこやかな寝息妻の座揺ぎなし

追いつけ追い越せブーツの進軍譜

兵庫県 遠山可住

あきらめてからしあわせにささやかれ

起きましたよとお正月旗を出し

作者より深い詩情で批評され

不景氣へえびっさんから春が明け

鳥取県 林 露 杖

尊敬もされずそれほど疎まれず

内職の老妻に済まないちろりかけ

眉ひいて女いくさの鹿島立ち

契約金流し新築廻れ右

島根県 榑 原 秀 子

柚子の香をお風呂へ満たす寒の入り

花一輪二輪と飾ざる床の梅

捨犬の虚勢ではえるあとすざり

枯木立春のべールを覆うてみせ

和歌山市 野 村 太 茂 津

芽吹く木に枯薦未練にしがみつ

真っ直ぐに生きる掟に叛いても

鈴が鳴る鳴るたしかに初春の城下街

埋火にはならぬと決めて風に立つ

京都市 山 本 規 不 風

だるまの目入れたとたんに潰される

まとまらぬ話に遠い道を撰る

疼く齒に未練はないが抜き惜しむ

手相見の上眼づかいはナゾがある

唐津市 新 岡 回 天 子

亡き友が尋ねて来そう昼さがり

さざんかの花散り落ちて春はそこ

宿がえに友情示す車びき

勲四等婆の胸に重たそう

富田林市 和 田 維 久 子

絵馬堂の白馬に賭ける受験の娘

大小の鍵で世間を振り回わし

錆びたり光ったり不思議な鍵穴をのぞく

その鍵を握る秘宝の虹の舞

大阪市 柳 原 静 香

還曆に弾むものあり初春の風

娘一家の温さで眠る旅の宿

血圧のカルテが今年へなお続き

気の弱り見せる夫が寂しくて

岡山市 川 端 柳 子

瞳の中に善人をみた許しましう

手渡してのちのわが子は嫁に聞く

時々片目バラ色だけをみる

よい正月だったと孫を見送って

岡山県 出 原 敬 一

ハモニカ長屋寝巻で礼に出る

進学しない子父の序列を知っている

波が問うても破船は過去を語らない

千魚揺れる養浜岬の沖は荒れ

呉 市 林 野 颯 光

階段で髪の香りを追っている

レイ掛けて呉れても妥協許さない

温い手が言葉となつてゐる訣れ

街の灯を二つに割って河が燃え

竹原市 時 広 一 路

一つ浮く雲に心を吸いとられ

海に溶け海に流れる四季の詩

腹立てたように雨雲低く降り

私には言えぬ言葉聞かされる

守口市 羽 原 静 歩

この土にやがて還るか花曇り

肩書きを取ると真実こぼれそう

勲章は要らぬひとすじの母の道

欺された母が仏の貌に見え

米子市 小 西 雄 々

手鏡へ仮面の出来をたしかめる

角と牙たがいにかくし恋すすむ

気疲れも語り和服の帯を解き

人並みに倅の灯を守りぬき

八尾市 大 路 美 幸

元朝の一步は空を見たいだけ

青年の枕 汚れたまま明ける

宝クジ売る母さんは夢追わず

老梅や静かな闘志抱いて冬

倉敷市 田 垣 方 大

孫の書く似顔は髪黒々とあり

工学部出ても縁起をかつぐなり

冗談に本音を言うている気弱

悲しみを知ってピエロの芸が冴え

和歌山市 津 田 与 史

市場籠の溜息政治へ向けて吐く

ユーモアも詰めて孫からプレゼント

わが勢力後退遂に四疊半

百円の夢買う列の中に立ち

神戸市 仲 どんたく

犬狼の上<sup>うわ</sup>目<sup>め</sup>出度き共白髪

薬<sup>お</sup>掴<sup>わ</sup>む薬<sup>お</sup>で御<sup>お</sup>在<sup>わ</sup>するえべっさん

高原へ画伯 嘶<sup>お</sup>く馬<sup>お</sup>をおき

はいる場所確かめに行く墓詣で

大阪市 本 間 満津子

よい後味残して去りたい独り旅

真実だけ見る人と居て肩が凝り

寝め言葉交して火花散っている

飲みに来た客はやたらにめでたがり

大阪市 江 城 修 史

万葉荘に恩師を囲む一句

向き合えば過去いきいきとよみがえる

一滴も飲めぬ男の黒田節

踏み台にされっぱなしで裏切られ

言葉もう言葉にならぬ妻の愚痴

大阪市 西 出 一 栄

一銭五厘からつづく賀状や祖父の友

うらやまし底なき胃袋持つ若さ



けんらんと散り敷く木葉古都の彩  
やまい神早ようそこのけ句が出来ぬ

東大阪市 桑原喜風

これしきの心の隙に入る悪魔  
年寄のせめてお邪魔をせぬ生活  
不況風師走の歩み重くする

竹中肖二氏急死

天国へ急ぎ医薬も間にあわず

東大阪市 落合思月

エリートを夢見るママにしごかれる  
真実をあばかれ凡人腹を立て  
処生にもたけて上手に借りてくる  
作業服脱いでブーツのお嬢さん

松江市 岡崎祥月

限界をどう越したのか籠の鳥  
一匹が狂って妻の頬やつれ  
大山の谷間冬陽が心地よく  
病葉のさびしさ朝の窓を明け

豊中市 戸田古方

貧しさも雑煮風土記のおもしろし  
たそがれをいい感じなど孫娘  
孫娘の初釜綺麗に晴れてくる  
ぼたん鍋出るまで干柿出してくれ

守口市 村田瓢太

しわよせは結局弱いものが受け

おこられてばかり妹出来てから  
箱書きの割に見劣りした中味  
たまには自由になりたかろうに夫婦箸

伊丹市 樫谷寿馬

俺のものだぞ全快のレントゲン  
清流は山の秘密を語らず  
血の通ってる夫婦もあるとゆうショック  
補聴器をつけて世の中暗くなる

神戸市 中村ゆきを

台所母と妻から年が明け  
ああ不況社長もヨガに入門し  
経営学開運学と経営者  
せせらぎを見つけたとこで昼にする

大阪市 津守柳信

野仏の笑うてござる雪歩巾  
旧友がひょっこり来ればセールスマン  
暖かい陽差しが笑う寝正月  
四十路に年玉くれる姉が居り

東大阪市 市場没食子

元日から測候所のすかたんめ  
御来迎どころか雨のお元日  
風光絶佳墓地大小の売出し中  
吝ち貯めで話にならぬ似た夫婦

高槻市 若柳潮花

病院の匂いのしない三が日

おけら火を傘で囲へて通り抜け

酒なめて飲んだ気でいる下戸の新春

影富士を見せて太陽のほり切り

倉敷市 野田 素身郎

不景気な新年ながら日本晴れ

仕事始めまた足早な父になる

平凡な日々の続きのお元日

暖冬へ父のマラソンまだ続き

桜井市 岩本 雀踊子

慾出したすきを騙されそうになる

雑布を干しての良妻賢母なり

はしゃいだ声だと自分でもあわて

点になる遠い過去をふりかえる

貝塚市 野坂 つき子

ナツメロが飛び出す母の上機嫌

よく笑う女がひとり居る安堵

逃げ道を探す女でピエロめき

悪女にも言い分あってゆずれない

八尾市 宮西 弥生

営業のお世辞とお客はおもうてず

麦の穂に踏まれて伸びる知恵もらう

ひとり寝の女に温い忘れもの

決心がつくと職場を広くする

大阪市 室谷 徹舟

ランドセル親の期待を背負わされ

スピード魔親の意見を背で聞き

熱心な先生敵も多くいる

車間距離とれば割り込む若い腕

倉敷市 藤井 春日

背のびして生きてる姿を父案じ

不況とは勝手すぎます社用族

荒れた掌でやっとなんだ小さな幸

グウダラと思うてた奴に批判され

今治市 長野 文庫

大みそかだつてペースは崩さない

掃除機も元日らしいとこに居る

元日に早くも悔いが一つ出来

宝くじその他大ぜい組のうち

貝塚市 行天 千代

のろくとも我が道を行く駄馬の意地

吹きさらしお墓の花は横を向き

のんびりと髪など染めて昼の風呂

長電話大事な事を言い忘れ

橿原市 岩井 本蔭棒

旅の朝この地はこの地の音で明け

やれ着るの脱ぐのと晴れ着世話がやけ

真相がまたうやむやで年が暮れ

部下叱る拳に机たたかれる

東広島市 高橋 鬼焼

ひめくりを重たくはいで職がない

風も春母のマスクよいつ取れる  
春の詩を刻んでくれる秒針よ  
種をまく時の無口を叱るまい

大田市 藤田 軒太楼

老醜の去る花道は飾りたし  
合掌の耳へ俗事の多う過ぎて  
補聴器の祖母に仏事を教えられ  
茶柱の気やすめ重たい靴を履く

仙台市 川村 映輝

テレビから笑いをもらう老夫婦  
他人から見れば無駄骨らしく見え  
老夫婦二人で病んだお正月  
金が無いから金の用が無い

西宮市 藤村 ベ女

日曜だから降る雪が楽しい  
要点がまたずれて来た話好き  
要点はしかと握ってとぼけてる  
詩を拾う散歩花びらさえ親し

藤井寺市 西 いわを

ほどほどな嘘が交った柔らかさ  
喪に服し初詣では京の寺  
京は良し何処からとなく除夜の鐘

東大阪市 崎山 美子

後始末に手をやくパパのクッキング  
再起する心に過去がつきまとい

七草で我が家のリズム取りもどし

西宮市 島居 百酒

真心で切手正しく貼る賀状  
百歳へかける咄も新春の夢  
出直しへ逆風固く門を閉じ

鳥取市 小林 由多香

するめ焼く臭い飯場に灯がともる  
一年がまたはじまった酒をくむ  
ピンハネを知らぬ残業汗を拭き

平田市 久家 代仕男

外孫を抱けば内孫ひき離し  
あり余る米に豊稔祈願する  
ヘルパーのノックと病臥こころえる

大阪府 黒田 真砂

暮しの垢浮べて仕舞湯やわらかし  
初春の酒五体に泌みる酔心地  
生きて居る確な証し人恋し

島根県 梶 みどり

まあるい目愛とミルクの満てる顔  
裏の裏かえして虚しさ強くなる  
老眼へ素直に通る今日の糸

米子市 増田 竹馬

手腕には触れず人柄ばかり褒め  
朝の靴妻の進軍ラッパ聞く  
奉仕する心生甲斐の一つとし

大阪市 横地雅風

背が寒い夜道を助ける一つ星  
券売機の故障は聞かず電車発ち  
よくよくの事情か悪筆から無心

和歌山市 吉野富子

対人へバランス崩れた日のあせり  
タイムカード余る時間をもため母  
母物のドラマへ夫の涙見る

兵庫県 大江秋月

初詣で隣の人も御挨拶  
退職をしてから年賀状が増え  
老眼鏡無いと思えば妻がかげ

諫早市 原田明春

妻と娘の内緒に俺の気ももめる  
木枯らしへマネキン夏を着せて立て  
百円でまた一年の倅祈り

岡山県 竹内翁童

騒音に馴れて都会をすてられず  
旅帰えり雑草にまで話しかけ  
思い出がすり切れたレコードすてられず

寝屋川市 江口度

間違つて悪魔に祈る時もある  
勝ち運を仏心もつて逃げ  
馬ある日牛のよだれを笑えまい

和歌山市 松原寿子

虚しさを水に流して春を吸う  
温情へ心がまあるく開きます  
倅せな噂をそつと見逃そう

玉野市 小谷仙山

攻撃は致しませんとバラのとげ  
酒が出てもめた話は流がされる  
日曜大工妻の注文多すぎる

兵庫県 河原みのる

芽出度うもないのに出逢う松の内  
日歩まけてくれてもよかりそな冬日  
目の黒いうちはうちが白らけてき

和歌山市 桑原道夫

置物の馬逆立ちをさせてやる  
泣き虫のつかんだトンボもう飛ばず  
自動ドア開くと人の顔さがす

大阪市 本庄金三

老令年金家族の者に当にされ  
保母さんも園児に混じる雛まつり  
冬眠の夢から醒めて春の詩

守口市 野呂右近

年賀状此の人々に支えられ  
病床に春うたがわず堪える女  
旅の宿雪の恐さの音に覚め

仮免許ごときに受ける排気ガス  
東京都 山根白星

盗汗かく夢は開かぬパラシユート  
告白となる夜の悪い風通し

島根県

大森 孝華

年末へひま人かける椅子がない

むかい風よけて笑顔へ明日を置く

ひとときの開放感へ虹が舞い

鳥取市

大塚 豊生

堪忍袋繕う糸は母が持ち

犯人も複数刑事も複数負けていず

色褪せた幕新春の宮飾る

生駒市

草 深 醉 升

家計簿のどこを減らそか不況策

我慢するほかにてだての無い庶民

物忘れ夫婦で齡と笑い合い

姫路市

大原 葉香

妻までも野党に回り父孤独

みのむしの孤高枯木にしがみつ

鏡拭き女心をときすます

和泉市

西岡 洛 醉

母に似た無口が出世の壁となり

花括けて妻に嬉しい今日があり

達者だけ取得凡人域を出ず

米子市

石垣 花子

それぞれにへそくり持つて共稼ぎ

貫いた意地癩丁の冴えに見せ

年玉へへそくり底つく孫の数

東大阪市

斎藤 三十四

盆栽の松ねじられるだけねじれ

枯れ落ちても松葉夫婦は手を組んで

越境して来た出来ない女の子

岡山市

直原 七面山

春雨の中で息づく女人寺

躓いた小石にごめんなさいと母

麻酔が覚めてああ生きている生きて

鳥取県

鈴木 村 諷子

後に続く零が値打を決めてくれ

かりにだよなどと巧みに身をかわず

そばに居てくれさえすればいい女房

氷見市

関 美子

制服を脱いで失う夢の数

絶頂から奈落寂しい素顔みてしまい

月当番仏頂面の夫おかし

川村 好郎

風邪ひいてお慈悲の牢にいる思い

反省も嘯みつつ風邪の箸をおく

風邪がまた論す隋性の朝の靴

あの時と同じ喫茶へ来てひとり

すみませんと心のしこりが言わせない

西尾 栞

旅日記小さな嘘を懺悔する

幻の邪馬台でよし炉辺話

潮流に乗って来た国四季の国

貫頭衣脱いで見せれば奇術めき

かたくなな教授の自説それもよし

正本水客

菊沢小松園

但馬出石の雪

坂道の奥まっすぐに雪の寺

雪おちる老杉のなか鐘を突く

隅櫓の白さは雪に負けじとす

白の深さで白磁の壺は暮れなすむ

歴史を背負う家並の低さに人が住む

伊藤茶仏

橘高薫風

山茶花の赤に冬陽の暖かさ

托鉢の僧も電車に乗る氷雨

インフレの不安ボタンが掛け合わず

円高に対策もなく日に疎とし

トンネルの闇最低の福田支持

浜田久米雄

ドラム缶の灯油も春を待っている

一年の計は三月から始め

三月の水そこらまで春が来た

我を通し無理を通して古稀近し

友達の死は自分より若かった

本田恵二朗

よく動く桂馬みたいな男かな

うとうとと炬燵でこの世忘れはて  
磨いても磨いても錆る鈍刀で  
パンを吊った糸意地悪くゆれ止まず  
海図捨て去って勘でゆく老船長

火の罨に女がとんぼ返りする  
躓いてからのその後が長過ぎる  
掌に乗せると乳房音になり  
おとなしい人ばかりでは無い墓の下  
戦に負けて案山子に弓を持たさない

(縮切後到着分)

末筆に君飲みすぎること勿れ  
安宅コレクション加彩婦女備  
朝の虹 雀に話しかけている  
垂鈍さんを祝う  
お恥かしい古稀と宿老温かし

病氣して馬鹿にしていた菓飲む  
時も時身代りのよう犬が病む  
獣医さん気軽に往診してくれる  
老衰の犬二、三日が山と云う  
今朝もまだ生きてる犬の小屋覗く

大坂市 大坂形水

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

北枕など云うとれぬ子沢山

竹中 肖二

北枕ということ、我々年代の者にはよく知っているけれども今の若い人にはどうであらう、蛇足と思うけれど、北枕は死んだ時に臥させる(釈尊が涅槃の時西面北枕だったのによる)ので、生きてる時は北枕は嫌がったものである。それで句意は、はっきりしている。唯肖二さんが一月五日に逝去されたが、十二月号の句といい今回の句と云い余りにも死に因縁のある言葉が使われているのが何だか淋しい限りである。

見通しは明るいだけ無責任

松本 忠三

某大臣の御託宣であらう。下五の無責任が馬鹿によく効いている。

ひとり居て漢法薬の匂う部屋

稲田 豊作

淋しいようで、何だか達観したような匂い

のする句。仲々作ろうとして作れぬ句、実感は人の心を打つものだ。他の作の中に、

知恵袋どこかに穴があいている 豊作

閑静の夜を耳鳴り騒がしく 同

大寒よ尿の頻度に耐えて生き 同

作者と私は同年輩だろう。共感するところが多い。

それなりのドラマ持つてるかすり傷

チャンスです今良心が死んでいる

岩田 美代

発想をこんなに巧みに表現されたのには、頭が下がる。第一句の、それなりの、という

言葉、第二句の、今良心が、という言葉の前

後の使い方心憎い程躍動している、実に上手

い。二月号の白眉中の白眉として推奨する。

中年のずるさを妻に指摘され

那須 鎮彦

この場合、男のずるさではあるが、兎角中年の男女というものは、社会に慣れたずるさ

がある、チャンと抜け道をこしらえた中年者の

のずるさは可愛目がない。作者はまだ青年で

ある。青年から見た中年のずるさかも知れない。

樟脳よ君と僕とは瘦せるべし

高杉 鬼遊

ここにも白眉中の白眉を得て川柳の醍醐味

というものにひたる。何回も何回も読み返して

ゆく中に、言い知れぬ川柳味の横溢している

のに感激する。瘦せるべしの、べし、に千金

の重みがある。瘦せなければならぬとい

う運命の諦観と悟道とがある、文語体も又川

柳表現の一宝刀である。作者がこの句を得た時の気持を察して、俺は川柳をやめまいぞ、と覚悟したことだろう。

妻に似たホステスがいて酔えぬ酒

平田 実男

今でもであらうが、お茶屋では、妻楊枝のことを黒文字という、というのは、妻楊枝という芸者遊びをしている旦那に妻という言葉がタブーだったからである。句意は判然。

ホホ笑ましい情景である。

底ぬけに明るい手話の子に見惚れ

岩井本蔭樺

私も又、車中でこんな情景に出会った。上

五の底抜けという言葉は川柳語であるかも知

れない、こういった身障者に使うのが一度は

どうかと思ったが、あとの七、五で救われる

のでホッとした。

開店の定連になりそな顔はなく

都倉 求芽

省略文学の面白さは、「開店の定連」で、

この店がどんな店であるかは想像される、開

店ときいて、安値、サービス、粗品進呈をね

らつてきて、その後定連として来てくれそう

もない忙しい許りの開店の述懐が躍如として

いる。穿ちの最たる句である。

▼12月の句に佳いが多い。12月の実感句

が十二月号になる羽目になったのである。

十二月手品も種を出しつつし

シャッターをゆさぶる風も十二月

昼めしを食べたかなあと十二月

十二月立ったまま見るメロドラマ

一 栄

# 虚無僧の陶人

## 東野大八

やきものの業界紙に身を置いて、もう十四年近くになる。歲月まさに飛箭の如し。

やきものとは、土を炭で焼成し、日常の用に供するもろもろの雑器をさすわけだが、下は使い捨ての飯茶わん、さら類から、上は一個五百万円見当の抹茶茶碗から花器、壺類まである。俗にやきものを総称して、業界人は茶碗屋という。うがち得て妙とも賞揚すべき呼称であるが、最近では右のごときラチもない格差が生じたのである。ラチもないとは、世にいう「陶芸」という得態の知れぬ芸術分野が茶わん屋の世界に出現した殊に他ならぬ。

「陶芸なる呼称は、実はわしが案出したものなんだが、昭和の初めは、陶芸といえは、サーカスのさら回しの芸人のことかといわれ

たよ」

加藤唐九郎はこういつて苦笑したものだ。

とにかく陶芸なるもの、世にいん盛を極めるにおよんで、シナ、朝鮮の古陶器の名器絶品の技法を模倣する陶芸家なる徒輩が、世の陶芸熱に呼応して雲霧の如く輩出した。ために無形文化財、人間国宝、文化勲章という資格認定の諸法規が出現し、もの心ついてから土いじりにあけくれた一老職人のロクろ三昧に、さん然たる勲何等の叙勲の沙汰が天下つたりする。汚衣破帽の八十爺さんが、泥だらけの両手を呆然とぶら下げ、叙勲の沙汰に鼻水を垂らしてこうつぶやいたものだ。

「わしは何も、そんな悪い事はしとらん」  
こういふ一幕を随処に体験した私は、やき

もの芸術なるマカフシギな現象に、蛤（はまぐり）変じて鷹になった幻覚を覚える。

農耕時代の朝鮮で、昼餉一度に使い捨てた三文茶碗が、いまや国宝級の宝器と称する井戸茶碗に一変した。その三文茶碗を今どきの陶芸家が、寝食を忘れて必死にその技法を追及するもの丸つき歯がたたない。そうした手合いが、巷に氾濫しあらゆる陶芸審査機関へ眼の色変えて殺到する。幸運にもその各賞にありつくと、個展、合同展でラチもないわが作品を誇示し、陶芸マスコミに対し媚態の限りを尽し売名に狂奔する。かくして芽屋変じて綺羅講堂の大廈を泥中に出現させる。こうした現代陶芸家図絵の中に、異色の一人がここにいる。月形那比古という。

彼の十三年の私の新聞のインタビュー記事を以下要約して再現することにしよう。

岐阜県土岐市の南丘、五斗時峠に一字の堂がある。この五斗時峠は、美濃焼の陶土の発掘工事場である。この工事場の片ほとりにその堂字があり一見わからぶきの辻堂風で、その傍らにバラックの小さい一屋があり、一基のささやかな穴窯（あながま）を抱いていた。

一歩なかへ入ると、ささくれた板の間は六畳敷ほどで、まさに廢寺である。なぜなら、



そこには素焼、焼成ずみのやきもの雑器のがらくたの山で、足の踏み場もない。

しかし、正面の堂祖には燈が輝き、そこに志野の茶碗が一個、恭々しく据えられ冷たく肌を光らせている。堂中央に小さい切り炬があり、筋骨逞しい僧衣の一人の男が着坐し私を迎えた。一見四十余歳、暮末期の壮士風でなかなかの迫力のある好男子。

「私は普化僧でして、尺八を吹いて巷で布施を仰ぎ、そしてその喜捨の宝金でカマドを築き、マキを買ひ志野を焼く。私の穴カマドも私一人で石を運び土をこねて作りあげたものです。一切私一人の仕事で、土がこんなに重いものかと私はホトケ様に教えられた」  
虚無僧の布施は、きくところによると当時一日五百円前後、その托鉢の鉢は荒志野の大きいものを使っているという。

「私の陶工としての師は荒川豊蔵先生、入門第一号、筆頭の門人です」  
と意気げん昂と言う。はて門人嫌いの荒川先生に弟子がいたのかと首をひねると

「陶工は人を師とするのではなく、陶芸の作品の肌を師とするので人間関係とはカンケイない」

と黒い長髪をふりたてて言い切る。

「それ志野は禪陶なり、月明神骨ひややかに陶を捻ずれば、禪怨はほうふつとして虚空にあり、茶禪は一如たり。志野盃にて茶を仰ぐ姿こそ既心是仏なり、私は仏心で陶を焼いている。わが窯はこれ明暗窯となん呼ぶ」  
彼のインタヴュー記事は、半頁（新聞大）におよび、私流に書いたことだが、この記事は彼の陶歴PRに絶大な効果をもたらしたことは、この掲載紙の件を今だに家宝として秘匿しているとは彼は今もっているのである。

本名磯貝実。生家は石工で靖国神社の大村益次郎の台石は彼の実父の作であるという。軍隊にも入り日大芸術部の色彩溶出科から学徒動員で、戦車隊に入りガダルカナルにも出かけ斬込隊長までやったという。

「私は講道館の柔道四段で、練習中四度落ちた。その夢うつつの中で、私はうすら寒い天地をうつつと歩いた。薄明るいその天地は月明そのものであった。明暗月照！そこから明暗窯と陶名月形那比古をみつけ出した」  
この一幕のインタヴューのあと、彼はわが志野のテスト作品の名作だと思つて加え、一個の抹茶碗を引出物とし、貴下の祥福を祈るとしようとして尺八の一曲を吹奏してくれた。菊水流のそれは靈慕曲であった。

虚無僧の陶人、異色の陶芸家として彼は注目され、次第にスターダムに乗りはじめた。彼は沙門の陶工であることを掲げ、日展はじめあらゆる一切の陶芸審査機関を無視し、陶芸界の一匹狼を自負してキャッチフレーズとし、荒志野を鬼志野と改め、彼と彼をとり巻く支持者の熱心な支援とPRもあって、単独で八方に個展を打って回った。この奏功成果により、現在では数奇を凝らした茶室に近代建築の粋を尽くした陶房を作りあげた。

過日、私はその豪華な陶房完成祝いに招待されたが、送り迎えは華麗なデラックスカーで、陶房には新車のライトバンが輝いていた。この日、私は戯れに一個の抹茶碗を仕上げ、彼の施袖で完成した。隻手で作られたわが国最初の名器だと賞めてくれた。その際、近代陶工の嗜みとして俳句を作りたいといった。それに対し「私は川柳だからダメだ」と断った。華麗な事業家と一変した今では、彼のぐい呑は一個五万円だという。しかし、かつての日、彼がくれた抹茶は、長女の仲人の引出物と化し、私の作った隻手の名器は、家の土間のサビキを入れとして数年前から埃にまみれている。



久恒内紀

俳風柳多留廿五篇研究

— (十八丁) —

八木敬一・鈴木	黄・紀内恒久
室山三柳・青木	迷朗・入江勇
西原亮・清	博美・岡田甫

314 書カぬのを踏台にする奥道者

八木 丱不明。

奥州の手書きで汚ごす浅草寺

(安四智)

の句から、お寺の建物の高い所へ何か書いて歩いたのであるか。字を書けない奴を台にして、その上に乗って書いたというのか。

青木 丱礎稿に述べられている「干社札」の事であろう。岡田甫先生著「奇書」に天愚孔平

(納札中興の祖)の記載がある。

主題句の「書カぬのを踏台にする」とは未だ白紙である納札(自書、後には版で刷るようになる)の入っている小箱の事であろう。

小箱など踏台の足しにはならぬと思われるが、他人のものよりは少しでも高い所、人目

につき易い所へ貼るのを自慢したのである。納札を書かぬ道連れの道者を踏台としたとも

とれるが、千枚の(たくさんの)札を所々に貼るのであるから、物議の種になるような事はつしんだのではなからうか。

岡田 丱礎稿の引用句「奥州の手書きで汚ごす浅草寺」が一ばん主題句の説明になる。やはり手書きの干社札のたぐいと思う。

315 藪から棒の出たとこハ小くるす

八木 丱天正十年六月一日、明智光秀は豊臣秀吉と山崎に戦って敗れ、江州に逃れんとして、小栗栖にかかり、土兵のために刺されて落命した。「藪から棒」という諺をふまえて

いる。本当は藪から槍で刺されたらしい。竹槍だともいう。

槍の出た藪ハ小栗栖ばかりなり

(拾四・27)

藪からハ棒よりひどい槍が出る

(四〇・21)

室山 丱小栗栖は、現在京都市伏見区。

岡田 丱同。

316 鳥籠へ蟹を入とくめたかうり

八木 丱「目高売」、当時そのような商売があったのであろう。蟹も一緒に売ったのであろうか、こちらの方は逃げ易いので鳥籠に入れて持ち歩く。

目高売壳土鍋を持て出る

(天五・梅一)

青木 丱贊。初夏のスケッチ句。句の裏には様々な形態の子供の姿があり、読む者をして、

幼き頃を回想させるに充分な句。

「目だかアー、金魚ッー」の売り声もある事だから、目高売ニ金魚売としてよいのではなからうか。

清ニ鳥籠ヘカニとは考えたものである。

岡田ニ同。

317 せうといふものが出来たとけつの民

八木ニ「けつ」は、夏の祭王。夏王朝最後の暴君。

くわんぬきハけつ王の代に始めたり

(二〇・20)

よくわからぬが、夏王朝の乱世の時代に錠前というものが出来たというのであろうか。くわんぬきハけつちうの代に始めたり

(拾五・2)

青木ニ同。夏の祭王は、シナ古代の伝説的理想の聖王堯、舜に対比される暴君の典型であり、殷の紂王と併称される。

堯舜の代に業のないものハ錠

(八九・21)

堯の代に細工のひまな錠と鍵

(二二丙7)

入江ニ同。礎稿引用「くわんぬきハ……」と同想句。

岡田ニ同。

318 そはの客かむ内ふたつ明ケられる

八木ニ客にそばを出した。それを客が噛んで食べる。もたもたしているうちに、もう一人は二枚目を平らげてしまっている。そばは大體噛むものではないようだ。汁をちよつとつけて呑むのが通とか。

青木ニ贊。「もりそば」で、出来たてのそばはのびていないので歯ごたえがあり、それを上品振って食べると、はかがゆかない。なりふりかまわず音をたててすすり込むところに「そば喰い」の身上があり、如何にも喰つたという気持になる。「ふたつ明ケられる」はもたもたしている中に、先を越されてしまつた、という事。

そばの客将棋の駒で数をとる

(三・2)

そばの客きれ〜に來てこまらせる

(四九・6)

岡田ニ同。

319 千早振ばあ様正五九月來る

八木ニ「千早振」は神にかかる枕詞。千早振ばあ様で釜炊いであろう。正・五・九月はその主祭日。

紀内ニ贊。千早振で神に関するもの——梓巫子をあらわしている。

入江ニ同。釜炊い(かまじめ)。巫女の老い込んだのがなつたという。毎月毎日に籠の荒神を祭つたが、特に正・五・九月は、その主祭日であった。

岡田ニ同。

320 御尤様と御殿にこしがわら

八木ニ「御殿」は御殿女中。「こしがわら」は、腰瓦と書き、土蔵長屋などの外壁の腰板の部に瓦を並べて塗りつけたもの。本句の場合は、仲条流の女医者をいう。

御殿女中は男子禁制で、妊娠するはずがないのであるが、そこは商売、「ごもつとも、ごもつとも」などと、腰瓦造りの主、女医者が言っているであろう。

岡田ニ贊。

321 地こくのころ麻おく沢で土用干

八木ニ「奥沢」は、武州荏原郡の一地名。現在もある。浄真寺の九品仏堂で有名。

芝西応寺町(現在もある)の鳥羽屋三郎兵エの妻が難産で死ぬ。地獄で血の池に落ちる。開山阿闍上人の法力により救われたが、その時の、腰から下が血に塗れた経帷子を、この寺に宝物としておさめ、毎年の土用干には、縦覧を許したという。

岡田ニ贊。

## 日本のルーツ

# 幻の邪馬台国を求めて

## 西尾 栞

一九七七年十一月十五日の朝日新聞夕刊の全面広告に、一行でも一句でも、歴史の空白を埋めたい。

78 邪馬台国シンポジウム。

構成、司会、松本清張氏。

とあって、七人の講師の横顔がズラリと並んだ一頁があった。之は一体何ならんと仔細に読んでゆくうちに、私の物好き、歴史好き、考古学好きが頭を拾げて来て、之は是非参加して、松本清張氏の声咳に接し、日本のルーツを確めんものと早速申込んだ。

(申込多数の場合抽籤)にも無事当選して、十二月二十二日手続き書類が届いた。

又その広告に曰く。主催朝日新聞。後援全日空。協賛博多全日空ホテル。

期日 53年1月15日～16日

会場 博多全日空ホテル

とあって、一月十四日に現地に飛び、十七日まで三泊四日の旅。参加費(大阪発) 3万3千百7円(航空運賃、宿泊料、朝食食代、聴

講料含)とあった。余りの安値に私は参加料を再確認した程であった。

そしてオプショナルツアーが五コースあった。

志賀島宗像コース、唐津呼子コース、筑後路コース、志岐コース、対馬コース、

そこで私は最後の対馬コースを申込んだ、費用は一万四千円であった。

一月十四日伊丹発十三時四十分の二〇九便は丁度伊豆地震の為とかで、二時間延着して十五時四十分で離陸した。

座席を並べた右隣りの紳士は私より少し余計頭が禿げていて、早々に言葉を交わすようになった。話される口元の辺りが、新喜劇の俳優伴心平さんによく似ていて好感のもてる人柄であった。シンポジウムに参加する話から何時しか年令のことにふれて、私は四つ年下であることを知った。一時間にして博多空

港へ着いて、ホテル迄の乗り継ぎバスに座ると又彼氏と隣席した。この奇遇を喜んで二

人はここで名刺を交換した。私は、日川協常任理事、川柳塔副主幹、西尾栞の名刺を渡した。彼は肩書なしの、すっきりした、西浦達弥と左端に、豊岡市伏、とだけ書いてある名刺をくれた。

「西尾さん、之はしおりと読むんですか」

「ハイ」

「本名で」「ハイ」と、バスが信号を曲つて一揺れした途端につい嘘の返事をしてしまった。

「明治時代のお父さんにしては、変わった名前をつけられましたなァ」ここまでくると、本名は巖です、栞は雅号ですと言ひ替えられないうちにホテルへ着いてしまった。

ホテルのロビーで休憩していると、部屋割が始まった。始めはシングルベッドの人が二十人程で、あとはツインベッドの人々の名を呼ばれた。好い人にあたればよいがと心に念じた。曾て私は香港へ行った時に同室した人が昭和生れの若い人で、年代にズレを感じた事を思い出してのこと。次第に呼ばれた人達はどちらも初対面のこととて、「どうかよろしく」「どうかよろしく」と鍵の音をさせて、エレベーターの方へ歩いて行った。私は最後に呼ばれた、そして続いて呼ばれたのが、件の西浦氏であった。

「これは、これは」と異口同音に発して、又々不思議の縁を喜びあびあって、九階の九二二号室へ入った。

私はここで、過去の香港のことを思い出して、「西浦さん、貴方は私より四つ年上だから

ら、ベッドは窓際のそちら、入浴その他一切のことは私より先に遠慮せずやって下さい」といふと、「いや、こりやどうも、私は本当に良い方とご一緒しました、どうぞよろしく」といふ言葉がはね返って来た。そこで先刻嘘を言った葉の本名問題を言い訳すればよいものをここででも言ひおぼれてしまった。だから西浦さんは今尚葉を本名と思つていられるだろう。辛いことである。

#### 旅日記小さいな嘘を懺悔する

一風呂浴びて浴衣に着替えて、夕食に行こうとすると、ここはホテルであった。フロントへ電話すると同じホテル中の食堂へ行くのに、洋服を着て靴を履いて行つてくれと言ふ。廊下はすべて歩道ですと言ふ言葉も言い添えられた。

数奇屋造りの料亭、筑紫野、は十五階にあって、博多の夜景を恣しきまにしていた。本場の活け鰻のさしみに、玄海鍋の鯛の味は九州に来た欣びの思い出となつた。ビール一本ずつに焼酎二本ずつという酒量の程度は又々倅せそのものであった。

#### 屢さしみ知らぬ同志がもう親し

部屋に帰って、裸かになつた二人の身長は共に一六八釐で、体重は西浦さんの方が私より二疋オーバーの七〇疋であった。

赤コーナーから共に跳び出してもよい格好な二人の体格であった。

西浦氏は、砂漠が好きで世界の砂漠巡りをしていると言ふ話や、それにつけて面白い話をした。

#### 色話思い出となるホテルの灯

翌朝八時に、トマトジュースとベーコンエッグとパンの朝食をすませて、三階の会場、万葉の間へ入ると、既に椅子の上に各自の持物を置いて良い場所は確保されていた。本年も又昨年につづいての参加者が一〇〇名程あるといふことだつた。そして東京方面からの参加者が一番多いといふ話をきいた。私はこの会が今年で二回目であるのを始めて知つた。報道陣約三〇名をいれて本日の参加者は六〇〇名ですと会場係は紹介した。

#### 邪馬の謎とは万葉の間でありぬ

諸々の挨拶のあと、愈々九時半、松本清張氏登壇して本日のシンポジウムの開幕となつた。清張氏は挨拶は約五十分。シンポジウムの司会者は空気の如く無色で、厳正中立がモットーである。喋りたいことはまだまだあるが之位でおいておく。と言ふと本日のトップの講師奈良大学助教授、田辺昭三氏にバトンタッチされた。田辺氏は考古学専攻の立場から、魏志倭人伝の中に「倭国の内乱」を語り、卑弥呼の家(墓)について、奈良県の箸箸古墳は考古学資料上百年近くも奈良のもので、彼女の墓は、倉敷市にある稲築遺跡のような墳丘墓でなかるるか、又岡山県総社市の宮山古墳が比定されるのであると四十分の講演時間を約十分間延長して降壇された。

続いて矢張り考古学専門の北九州市立歴史博物館主幹、小田富士雄氏も九州から出土する考古学資料により、邪馬台国の九州説を力説され、三雲遺蹟、井原遺蹟、平原遺蹟の漢

鏡の面数をあげて、之亦十分間延長の講演であった。

ここで十三時三十分迄中食休憩があつた。

中食は和食であつた。鰻と牛蒡と連根の焼き合せは九州の魚の旨さを物語つてくれた。

十三時三十分再開。立命館大学助教授山尾幸久氏が登壇。文献史学の立場から、邪馬台国は畿内の大和川水系にあつた部族連合と考えられる。倭人伝に出てくるその南の狗奴国は伊勢地方という設定の元に畿内説を力説して同じく次の講演に十分間食い込んで降壇。

次は早稲田大学教授、水野祐祐講師は「女王国と男王国」という主題と副題に「女王国の末路」を掲げて、矢張り文献史学的に、前の山尾講師の畿内説と真向から反対の北九州説を、卑弥呼並びにその二代目の耆與の女王の存在論に入りその後の二十九ヶ国連合体がどう展開してゆくか、又古代国家の統一など説いて、その南にあたる狗奴国はクナー熊一熊本地方であるという説をされて降壇。

#### 倭人伝あ読むころ読むもう読む

ここで十分間の休憩があり、十五時三十分より、東京商船大学名誉教授、東海大学教授茂在寅男氏が登壇されて、先に配られていた四枚入の海図を元に、歯切の先い江戸子舟で「航海術とはある地点よりある地点に、安全且つ快速に達するのが航海術である」という定義より説明され、倭人伝に出てくる韓国を経て、あるいは南しあるいは東し、その北岸の狗邪韓国に到る、七、〇〇〇余里という文章に対して潮流の関係を説得され、倭人伝

にある一里は約九十三メートルとして水行十日、陸行一月、又郡より女王国に至るには、万二千余里、又東南に陸行すること五〇〇里伴都国に到る。等について一里を約九十三メートルと規定するとびつたりという行程になるといふ説明で聴講者を喜こばしう降壇。この時古代の里数を計る機械として切子車というものがあつたと耳新しく聞いた。

#### 潮流のつてきた国四季の国

次に登壇されたのは、国学院大学の樋口清之教授であつた。昨年六月、柳詒「平安」二十周年川柳大会に記念講演をされた講師で大変話の上手な始終にこやかに笑みじらたえた方であつた。講師は民族学的に論じられて、倭人伝記載の生活様式を、考古学、文化人類学、風俗史学等を綜合して語られ「男子は皆露筋し、木綿を以て頭に掛け、その衣は横幅、但々結束して相連ね略々縫うこと無し」一婦人は被髪屈筋し衣を作ること貫きて之を「衣る」と貫頭衣の見本をもつてきて、壇上に綺麗な娘さんを上らせ、貫頭衣を被せて通風性等の説明をして、ルーツはポリネシア南方系であることを強調して降壇。演出は効果一〇〇パーセントだつた。

#### 貫頭衣脱いで見せれば奇術めき

続いて、東京大学名誉教授 江上波夫氏は例によつて、騎馬民族説をされ、女王卑弥呼は魏より「親魏後王」の称号を与えられ、倭と魏は服属的關係でなく、同盟的關係であることを早口で喋られて「邪馬台国の女王支配から倭国の征服王朝まで」持ち時間以上に講演されて終了したのが十九時を少し過ぎていた。

かたくなな教授の自説それもよし朝の九時半から夜の十九時迄、九時間半と

いう長帳場は最近の天井知らずの邪馬台国ブームを物語つて、専門家以外の町の歴史家、自称考古学者、好事家の百家争鳴が面白く感得した次第であつた。

#### 考古学街の学者の一家言

それでは一階のシンポジウム受付迄行つて、試みに聴講生の男女別と平均年齢を尋ねると、まだ確実な数字は出ていないが、女子は約一割、年齢は五十才を少し出たところではないかという答を得た。

#### 家を出る時、「邪馬台国が何処であらう」と

卑弥呼が誰であらうと、貴方には関係おまへんやないか」と言うて見送つた家内に、この数字は大変良い土産になつた。

#### このホテルは、昨年オープンした許りだと

聞いて成程綺麗な筈だと思つた。今度の参加費が大変安いので、どんな宿に泊らされるのかと、飛行機中の話で西浦氏も私も案じて、洗面具一切から用意してきたのに、すっかりのがはずれて二人は大笑いした。

#### 今夜は洋服を脱ぐまで夕食に行くことに

した、博多の街に出て名物の水炊きでもと相談したが、すっかり疲れた二人は矢張り十五階へ行くエレベーターのボタンを押して、今夜もビール一本ずつと餃子二本ずつで、しやぶしやぶを食べることにした。そして良い具合に昨夜の懲罰があつたに似た。そして今日の講演を看に楽しい夕食を摂つた。

#### 幻の邪馬台国でよし妒辺語

西浦氏に最も感心して敬意を表することは、今日の七人の講演を全部ノートされたことであつた。万年筆のカートリッジが失くなつた時に赤のボールペンで続けておられた熱心さには全く敬服した。洵に見習うべき情熱だと思つた。

翌朝は昨日の通りの朝食で、九時に会場へ入つた。一番前の端の方で、講師を横から見る位置になつた。今日は壇上に机を半円形に並べて、清張氏を真中に七人の講師が居並んだ。

#### 定刻九時半開会。清張氏の挨拶のあと、愈々

斗論に入つた。テーマに対して各自の主張はされたが劇論はなく、樋口講師は、「松本さんは喧嘩させようと思つているだろうけれどそれはいいかないよ」と言つて会場を笑わせた。

#### 十二時から十三時半迄昼食休憩であつた。

今日の中食はパンとハンバーガーの洋食だつた。再会の十三時半からは、司会者松本清張氏の総まとめであつた。後ろの方からかすかな賑がきこえて来た。遂に九州説、畿内説、どちらにも軍配が上らなかつた。本居宣長、新井白石の昔より解らない邪馬台国が昭和の御代になつてそう簡単に解決するものではなかつた。

#### 幻の邪馬台国、謎の邪馬台国として今年も

結論を得ぬシンポジウムとなつた。「そう簡単に解つては折角の邪馬台国の値打がない」「解らないから来年も全日空さんに儲けてもらいます」「解らないから面白いので、解つてしまえばそれまでよ」

#### 「来年のシンポジウムは韓国へ渡つて、そ

もそこから始めるか」邪馬台国わからないから金になり五時三十分終了。それから各講師のサイン会があつたので、私は博多駅の井筒屋へ走つて、色紙を二枚買つて来てその列に並んだ。そして西浦さんと一枚ずつわけた。

十八時三十分より交歓パーティーが開催された。会場の周囲は、博多名物の雑菓、活作り梅ヶ枝餅、馬刺し、その他沢山な屋台が並んで、真中の例の如く、洋食和食の突き出しがあつて、ビール、酒、水割りも呑み放題であつた。グラス片手に講師の誰彼をつかまえては、勝手な邪馬台熱を吹いたり、質問したり講師と並んでシャッターを切りつひりの和やかな交歓パーティーが八時までくりひらげられた。

パーティーを廻っている中に、大阪空港の受付で出遭つた神戸の女性二人と話すタイムイングになつた、西浦さんのカメラに四人並んでレンズに入つた。写真が西浦さんから来ると私が中継する約束で、住所氏名をきいておいた。彼女等の明日のオプショナルツアーは彦岐コースであつて、私等は対馬コースだと云うと彼女等は大笑残念があつた。

彦岐、対馬コースの方達は明朝七時四十分は一階ロビーへ集合というので、早々に部屋に帰つてシャワーを浴びて寝た。

西浦氏の凄まじい厭で、フツ目が覚めた。二時であつた。七時にモーニングコールが鳴つた。今日の朝食は二階の「桃杏」という中華料理であつた。葉臭めいたチャブスイがおいしかった。豆の一品ついた粥とシューマイと野菜と他に一品のついたポリュームのある朝食だつた。

明方のうつつといふ天気も、八時半空港に着いた頃は素晴らしい天候に変わつていて、誰かが、邪馬台日和だと言つていたが、日本晴の先祖だから、素晴らしい日和に違ひないだろう。空港で彦岐組と会つた。そして彼女等と手をふつて別れた。

空港の一期一会は手をかざし

空路半時間にして対馬に着いた。玄海灘に影をおとす、YS11の銀翼はまるで鷹のように軽やかであつた。

冬風ぎの島へ空より渡りけり

今日の案内された方は、対馬郷土研究会の高雄武保氏であつた。携帯マイクをもつて、参考書を沢山かかえて情熱をこめての案内振りには頭が下つた。対馬組には、茂つた講師夫妻と田辺講師が参加された。五つの古墳を見て廻つた。ダラダラ坂の獣道を上り下りした。所々に根雪があつた。昨日は寒い風が吹いて雪が散らつた。案内人は言つた。

今日からの四温を語る島言葉

鶏知の港で、汐帆というのを見せてもらつた。普通帆は船の上に乗るものであるが、汐帆は船の下に張つて潮流を利用して航行するようになつてゐた。

初旅や汐帆の島の汐流れ

今日の昼食は美津島町営の国民宿舎「対馬」で石焼料理という珍らしい料理であつた。平たい石を火にかけて、石の上へ植物油を塗つて、その上へ鱈、鯛、鳥賊、蛸、玉ネギ、茄子、ピーマン等をのせて生焼のころを、ボン酢で食べる郷土料理である。どこかで海賊料理だという声があつた。魚が新鮮だから、どんなにして食べても旨いだけだ、又格別の味であつた。

対馬なる石焼料理小正月

晴れた日には、上見坂の展望台からは、韓国の山々が見えるのだけれど、今日は午後から曇つて見えなかつた。李ラインはあの辺だろうと指さす人もあつた。

邪馬台をたずねる島の冬霞

あの山の天辺で第一の狼煙をあげ、第二の狼煙は白岳の頂で上げ、次々に上げて、彦岐、

唐津と遍伝していくことになつてゐる。と言ふことを高雄氏はマイクを左右にふつて、話をつづけた。狼煙という字の説明に、昔は狼の糞を焚いて狼煙にしたのが始まりだといふ。何故、狼の糞を焚いたかというのと、狼の糞を焚くことと樟腦の匂いがして、時間的に長く燃えている点を利用して烽火にしたということである。又どうして狼の糞と他の動物の糞を見分けるかというので、狼は獲物の動物を毛もとも食べるので、その糞に毛が混つているからすぐわかるということである。その毛が樟腦の匂いとなるのかも知れない。

石焼料理で半時間も予定の時間食つたので、展望台でそこそこにして、途中椎根の石屋根の倉や、元寇の古戦場を見て、対馬最大の町飯原町へ下つた。この町は対馬の殿様、宗重尚より三十六代の当主武志氏迄続く城趾のある町である。

対馬は山又山の島だから米がとれない、内地から移入するより朝鮮から船便で入れる方が早いので長らく朝鮮米を食べていたといふ。そして民具の名に朝鮮語そのままのものが多くは朝鮮との距離を物語つてゐた。又ここでは甘藷のことを孝行藷といふ。その名にも由来がありそうだがききもした。

飯原では、宗家の菩提寺、万松院と史学館を見た。万松院の古い山門を見上げてみると、折からハラハラと時雨がきた。変り易い島の天候であつた。

十六時島の空港へバスが着いた頃は嘘のように晴れ上つてゐた。

飛行機のフライトは十六時半だつた。私は空港の外に出て再び訪れることのないであろう対馬の山々を飽かず眺めていた。

(終)



菊沢小松園選

今治市 矢野佳雲

親の縁うすく育って子に甘い  
声明書どこにも実印ついてない  
ここまではやらぬと思うたからやらせ  
初詣で去年と同じこと願う

表彰状破り捨てたい今日を生き

尼崎市 中谷利美

恋人にされてもけじめつけたがり  
大卒が聞いて呆れる子の手紙  
安楽死だけが願いの寺詣り  
世渡りの上手な昼と夜の顔

三重県 川上富子

主婦として六法全書を引くある日  
騙す気の指切り絡みついたまま  
通夜の席みな惜しかった人で良し  
ハンガーに吊られた作業服の愚痴

愛媛県 宮尾みのり

ひよつとこの本当は泣き顔かもしれず  
ほどほどのしあわせでよしみな無病  
恵まれた立場でものを言う恐さ  
妻の座の色は自分で染めていく

松三日朝寝の癖がつきはじめ  
一年の計が泣きたい不況風  
ローンまだつづき建具が軌み出し  
時間割変えて校庭雪合戦

熊本市 有働芳仙

松とれて青色帳簿へ切り替える  
欲捨てぬ妻で時間に責められる  
まな板は七草知らぬボードです  
平凡な人生の唄うたえない

寝屋川 柴田恵美子

男にもけなげと思う寒椿  
おとどしの口約束が胸にある

八尾市 納史葉



雪明り酒はまろさを増して行く  
約束をはたすと眠り深くなる

松江市 梅本 登美也

しんがりに母が唄ったためてたい日  
割り勘のチップはもてた方が出し  
寒椿裏日本の色で咲く  
すぐ職を代える男が名刺刷る

名古屋市 大林 曲ん手

行きついたとこで気の付く車止め  
無に帰る余裕は蟻の足になし  
裁かれる日のでたちは絵にならず  
はた目にも慎しむべきは昼の酒

岡山市 原田 凡太郎

寒燈下麻酔の醒めるのが待たれ  
下役の僕には隠れみのが無い  
漱石を机上に置いて老の日々  
母の字で旧正月の餅が着き

旭川市 朝倉 大柏

極楽を小耳に挟む石の段  
踏む強さ弱さも父の子を見る目  
夢のまま育ててやりたい孫の笑み  
齡聞いてから寝め合っている若さ

今治市 萬本 昌道

片恋の恋と言う字よ消えてくれ  
返り血も浴びずに慕情フィナーレ

エネルギー開発などはない余生

柏原市 小谷 葉子

風向きが変り悪女ぶってみる  
雪ダルマをつくる哀しみ深くなる  
過去捨ててもまだ祇王寺から去らず

鳥取市 加藤 茶人

ロマンスの花も咲きそな日のこたつ  
地味に着て母さん過去を語らない  
口いっぱい乳房くわえた児の昼寝

橋本市 岩倉 天彦

終バスでとんぼ帰りをして帰り  
如才なく医者長靴できてくれる  
肩のごみわたしが生んだ子へ背伸び

和歌山市 福本 英子

故郷で若水汲んだ井戸に逢う  
幸福な柚子を数える仕舞い風呂  
黙秘から心の中がしゃべり出す

松原市 北野 久子

聴えぬが心に響く除夜の鐘  
娘と思ひ嫁の不足も言わずおく  
あきらめた耳が医学にまた揺れる

出雲市 森山 健太郎

踊っても踊ってもまだ笛を吹く  
都落ちそれでもとにかく支店長  
満五歳オセロの講師疲れ果て

堺市 玉井邦晴

共稼ぎ男の職に口を出し

パリにいる夫へ今日の通話料  
生きていた証拠のように賀状来る

広島市 すがかつこ

氷点に耐える女で髪の束

すばらしい情事なら合鍵を渡してもいい  
とまり木に定位置があり体臭を残す

今治市 園部正則

貧乏の家系の枷は抜けきれず

子に遠く離れて今日も飯を焚く  
過去を消せる消しゴム欲しい夜もある

広島県 砂田静佳

流行の早さブーツの大闊歩

耳掃除すんだが名案まだ出ない  
チョコ一杯愚痴一口をきいている

大阪市 三宅憲司

おいそれと思いのままにゆかぬ常

今月もソロバン通りゆかぬ月  
一年中値引きの札がぶら下り

唐津市 松垣岩光

新妻のうちは返事もよくはずみ

出来たての夫婦入場券に見送られ  
デラックスな病院薬もたんとくれ

唐津市 岩崎実

体当たりひっくりかえることもある

根回しを先手先手と管理職

欲のない赤子の顔に魅せられる  
そっと抱く皆それぞれの一頁

八十の中に女の香が残り

初風呂に古稀の素肌を撫でて見る

母を見て娘は育つ台所

本人は挨拶の長さに気がつかず  
暖房が利いて眠たい受験生

一代を損 積み重ね慕われる

陽の当る椅子で火種は消えかかり  
毒舌が相手の深傷に気がつかず

人の好いところが取り得で出世せず

置いとけば便利屋だけの平社員  
定年へせめて笑顔で手を振って

刈草を小山が動くほどに負い

郵便夫仔犬の頭撫でて去る  
雪掻きの夜は雪掻きの夢を見る

三カ日のんびりまわる夫婦独楽

倉敷市 藤原健二

唐津市 田口虹汀  
唐津市 桑原掬治  
和歌山市 浦野和子

岸和田市 池田香珠夫

残された命へピンクの眼鏡買う  
愛情の手綱広野へ解き放つ

大阪市 野田君枝

恋人と逢えた夢からさめる朝  
惜しげなく使いたくなるデートの日  
春うらら我が家の花も咲きそろう

島根県 飯塚虎秋

モーニング新春に胸張る子に育ち  
どこをどう転げていたか丸い石  
日の丸を立てて明治の空仰ぐ

羽曳野市 麻野幽玄

不本意な針に掛りし錦鯉  
薬漬へ堪え抜いた胃を庇うかゆ  
からっぽの心を抜ける冬の風

岡山県 柳原孝柳

初恋の余熱さめぬままとつき  
手に余る女が今日も待っている  
口説いてた女の声で目を覚す

大和高田市 岸本豊平次

寒牡丹春には遠い色で咲き  
考えを変えれば浄土に行けそうだ  
風呂水が滲んで気が付く今日の傷

海南市 牛尾緑楼

子を叱る声がいつもの朝にする  
初仕事注射を打ちに行く負い目

裏口を頼む親父の細いすね

鳥取市 岸本無人

茶の間から一人抜けてる受験の子  
あの頃のえくぼが深い皺になり  
輝きがだんだん失せた七光り

出雲市 吉岡きみえ

浴槽に枯れた女のかるいこと  
一杯の酒に寝息のやすらかさ  
遊び疲れた男の預金高

西宮市 杉浦婦美子

他人にゆだねた独楽はよく回る  
正直な鏡が憎い五十坂  
いたわりに心の皆崩れる日

岡山市 清水金太郎

他人の子の事には理解のよい親爺  
御歳暮を届けに来ても犬は吠え  
倒産をしてから社名世に知られ

島根県 角耕草

芸のない歳暮は軽くあしらわれ  
売上げの伸びが無口な父にする  
減反の田に一徹の鋤初

岡山市 井上柳五郎

声はずむ賀状がわりの初電話  
祖父が風主役の孫をそっちのけ  
せめて子等に木馬に乗せる不況風

八尾市 田中紀美代

忘れ物取りに戻れば揉めており  
忘れっぽい女で倅せだつたかも  
馬車馬の娘だからシンデレラになれる

大阪市 堀口欣一

キッスしたいような唇前にあり  
老醜になりたくはない替上衣  
町工場並みの大学研究室

尾鷲市 渡辺伊津志

思い切りぶつけた愚痴が通じない  
野鳥来る樹を切つてから客が減り  
きこちない手つきで菓飲む安堵

泉佐野市 大工静子

生き延びて孫の着付けに嬉しい日  
友病んで初めて気付くありがたさ  
病状を知らぬ笑顔に言葉切れ

広島市 佐々木玲二

かるうじて算盤合うて除夜の酒  
シメ飾り街には街の顔があり

大阪市 欄蘭

屠蘇酌んで私の地図を描き始め

榭の角から今日の疲れを飲み下し  
井戸端でポックリ寺へ一致する  
御近所が皆んな倅せそうに見え

吹田市 藤原世史春

知らぬ間に玄関にある回覧板

寝るために生きてるよううちの猫  
北海の猛者粕汁の中にあり

岡山市 花田たけ志

血圧を下げる支出に朱を入れず  
節つけて便り読むよな歌謡曲

鳥取県 広富白峰

臍で舌出しだし胡麻を摺っており  
生きている証しに賀状出します

唐津市 田中紫浪

孫の守りしいしい岸の芹を摘む  
空巢にも素通りされる裏長屋

唐津市 山下勝一

一人よがりブーツの脚でない女  
二〇〇海涇罰金出して雑魚ばかり

唐津市 佐々木久隆

賀状来ずここで人脈一つ切れ  
早寝早起き大晦日から崩れ

唐津市 三浦ひろ坊

下戸だから乾盃の手は高く挙げ  
三面鏡が裸のおれを笑ったな

豊中市 田中善四郎

祝盃に嬉しい涙浮いている  
幸せな暮しおろかな愚痴を言う

鳥根県 松本文子

バラ色のハンドバッグは娘にゆずり  
線を引くああこの友ももう居ない

岸和田市 島崎 富志子

子ら旅に七草粥を独り煮る  
いろはからやり直す気も十年目  
農民記書いておかぬと風化する

島根県 岩田 三和

元旦に抱負の重い日記帳  
囑託と言う名で給料一ダウン

東広島市 石井 さわ子

日本中寝不足にして年が明け  
小銭入れ一円仕方なく入り

大阪市 平井 露芳

目標に達しダルマの眼が笑う  
母の亡い故郷だんだん遠くなる

熊本市 北川 一進

それぞれの理屈が有ってもめる酒  
お年玉悪い買辯つけてくれ

喜屋川市 福富 隆子

病因を上手にきかす聴診器  
親と子の意見時代の波がゆれ

倉敷市 斎藤 通風

こがらしに明治の女重く散り  
やせ犬の分別くるり後向く

大阪市 小谷 清女

遣言もない仏壇の鐘を打つ  
大関が負ければ病名つけてくれ

町田市 竹内 紫鏑

上役は只なればこそ注ぎまわり  
ベルモットとおんなじ色の服着てた

喜屋川市 小林 鯛牙子

床屋に戦地語らすも齢  
同窓会で髪が黒すぎ

東予市 小山 悠泉

駄馬なりに歩巾が合いし夫婦仲  
経済天国ローンで学士も生まれ

竹原市 古谷 節夫

妻に背押されて義理へ重い足  
其の訳を花は知らない花言葉

尼崎市 中塚 喜甲

肝心の事は忘れた長でんわ  
余りそうな名刺やたらにまいている

新潟県 高野 不二

笛吹けど踊らぬ夫になりました  
すらすらと運ぶ縁談危ながら

羽島市 伊藤 静枝

出る杭は打たれる程に出てみたい  
夢だけは大きく墓の中に入り

山口県 高崎 雀声

チャップリンは正月映画に生きており

青森県 波ただお

晴天の日のハクチョウは王子めき

新婚の賀状は甘い香も運び

北九州市 三上春雄

身体はっぴいためて外科は感謝され

血圧と年金わびしい同窓会

和歌山県 中根 勇

寝て欲しい人には痛いところ突かれ

飯事でもう男の子尻に敷き

大阪市 北 勝美

樞原に忘れられてる金の鳶

柏手が山に吸いこむ三輪の神

宇部市 樋村天流

千振りを信じ五右衛門風呂が好き

死神と対決をする千羽鶴

高槻市 大垣 たもつ

三カ日茶漬が一番性に合

脱サラへ先ず女房のお好み屋

羽咋市 三宅ろ亭

外は雪こちら湯壺で小原節

コラム欄記者教養の度を示し

兵庫県 高橋 近江

アラソオと米作農民聞いとんか

何よりも転作アイデアア今や急

豊屋川市 稲葉好子

文鳥に魅せられて化粧したくなり

母の年そっくり癖を貰い受け

大阪市 新川 貞祐

寒翁が馬と知ったは喜寿にきて

ももんじの看板を見る木曾の村

橋本市 森脇 善彦

一年の計を晴着にこめる父母

待ちぼうけ墓穴を掘って疲れます

岡山県 池田 半仙

バス疲れガイドの声も子守唄

六十の体験漫画に歯がたたず

豊中市 満仲 きく子

席ゆずれと言わんばかりの目に出会い

メロドラマみたいに狂えず団地妻

岸和田市 清野 こう

孫のぬぐぞうりのみだれ直す役

転勤の変更家族をほっとさせ

富田林市 中村 優

ふる里へ帰る名刺は別に刷り

花言葉すこしは判るベレー帽

岡山市 串田 句味地

土百姓八十路が過ぎて断ち切れず

肩の荷を下して次の荷にゆずり

松江市 黒目 大鳥

盲愛の杖もつきへり北の果

法灯に老醜ゆらぐ三回忌

鏡の前でタバコの吸い方工夫する  
倒産や店じまいやと客を寄せ

菜園の外の雑草逞しい

ジャジャ馬も子を持ち親の気持知り

ささやかな年金くらしを羨やまれ

信じとこう だました奴を哀れんで

きれいごと云って人間エゴイズム

赤ん坊いつかこいつに絞られる

堺市 檀野茂子

伝言板暗号のような文字ならべ

堺市 片山敬三

唐津市 筒井朴竜

娘がくれた夢は大きな玉手箱

出雲市 高見鐘堂

大阪市 中辻千子

今日からは新採となる出勤簿

大洲市 米沢暁明

大阪市 岡田ふみ

屋根続き猫にはどれも我が家です  
賽銭にベースアップのない景気

岐阜県 市川鱗魚

八戸市 島田昭治

倒産をさせる権利の旗を振り  
守備捨てて写経心へささる罪

八戸市 紅葉山

明日はあす今日の気ままを言いたがる  
白い髭又かみそりに愚痴を言う

出雲市 板垣夢酔

やや左責める言葉を持つ若さ

### 日川柳

#### 第四回総会と懇親宴

▼5月4日11時開場・13時開会(17時閉会)

▼会場 横浜港繋留氷川丸 観光船会議室参加資格 各理事と加盟社に属する川柳人でありは制限なし。(議決権は一社一簡) 各社より提言をまつ、簡単な要旨を4月10日まで、藤島茶六・副理事長(〒280千葉市新町七〇)へ書面によって連絡ありたし。

▼会費 三千元 総会 懇宴(4月15日まで)に日川協東京事務所へ必ず申込みを願う) 会場の氷川丸へは、横浜駅東口降車、日川協旗のところへ参集(11時より12時半まで)

氷川丸へ数回バスで送迎し、その時間外は各自ご自由に横浜駅東口前より市営バスで山下公園前(氷川丸乗船入口前)へ  
▼宿泊 5月345日とも旅館、ホテルの料金交渉中、後日、日川協東京事務所より詳細案内状をお届けします。

○第二回全日本川柳大会は本誌前月号参照。川柳大会当日は、4日と同じ横浜駅東口前から(10時より12時まで)会場へバスで送迎します。その時間外は国鉄関内駅・かんない・(横浜駅より二ツ目・横浜し桜木町)関内駅下車、徒歩7分。新設横浜野球場を右にみて一とまたぎしたところが、横浜市開港記念会館会場です。17時からの懇親宴は中華街入口の「寿宴」で会場は遠くない。  
▼総会全国大会の間合せは一切東京事務所へ

# 愛染帖

## 橘高薫風選

落ちそうな椿に言葉かけて行く  
本当を言わない人でもっている

兵庫県

遠山 可住

夕焼がそのまま残る金魚鉢  
腹一杯食べたら夢が一つ消え

藤井寺市

西 いわを

もみじ真赤今年の役目果しませ  
葉蘭蒼々終日陽を受けず

東広島市

高橋 鬼焼

一枚の便りと笑うひとりぼち  
一月のドラママハパンがこげてゆく

宮尾川市

江口 度

神はまだ女を強くするブーツ  
社長くるこわいこわい後始末

京都市

山本規不風

魂が抜けてた桃が咲いていた  
ご意見と云われて喋り過ぎた酒

島根県

小砂 白汀

麒麟が走ると地平線がゆれる  
わが影を土足にかけける四面楚歌

米子市

石垣 花子

世帯ずれ世間ずれせず無し妻  
母さんのスパルタこわす甘い父

尾鷲市

渡辺伊津志

反抗を凝縮させた床の石  
吊橋をくぐれば翼濡れている

豊中市

戸田 古方

折り畳み機のように白鳥翼折る  
雪見酒などと夫に甘えられ

八尾市

高橋 夕花

この家の水に染りて糸を解く

意気地ない女に冴える冬の月

和歌山市

西山 幸

裸木の胸のすく嘘まだ聞けぬ  
知らぬ間に蝶がとまっていた墨絵

神戸市

小浜 牧人

コーヒー飲んで独りの心温める  
風花や浜のお嬢のなまこ買う

岡山市

川端 柳子

二人目の孫にも春を溜める壺  
笹舟になりきってみる泣きませぬ

大阪市

神夏磯道子

わらべ唄祖母は真黒い鶴を似合  
うぬぼれた真赤なバラがよく似合う

倉敷市

水粉 千翁

こっそりと埋め合わして妻の芸  
ねだられてこの無理こそは孫のもの

倉吉市

奥谷 弘朗

寛容はあるにはあるが今はない  
愛着は良い給料が取れるだけ

今治市

越智 一水

老婆のあくびわびしい秋なるか  
波荒れていても初日は堂々と

島根県

飯塚 虎秋

対談はえんえん赤坂までもつれ  
バス停の近いおかげで乗りおくれ

平田市

久家代仕男

微笑消さずころにしかと蓋をして  
愛憎の薄らぐ中で死をみつめ

倉敷市

小幡 里風

罪深い女が積んだ丸い石  
それとなく僕に似ているモニター

倉敷市

小幡 里風

真実がある扇簞の書き損じ  
同士討させる奇策の耳打ちよ

東京都 山根 白星

青森市 工藤 甲吉

寒厳し枯木悠然と泰然と  
生きているものは葉が出て花開く

堺市 高橋千万子

男らしく女らしくの三ヶ日  
面影に何かたさねばうすれゆく

寝屋川市 小林鯛牙子

二次会になるまで本音洩さない  
聖夜なりひたすら子らの信じがお

貝塚市 野坂つき子

母さんを欺すと鈴が鳴り止まず  
どん欲になって走れぬ女です

大阪市 河野 君子

狂い咲き夫は花咲爺になる  
髪伸びた分だけ業を深うする

富田林市 岩田 美代



野良犬の空しき記憶掘りかえし  
人形の瞳安易な妥協許さない  
今治市 月原 宵明

岸和田市 池田香珠夫  
柿剣いたままにドラマの終るまで  
切株に腰かけて見る里神楽

島取県 鈴木村飄子  
青海の額へ男の履歴書く  
瞑想のただ雨だれの音ばかり

八尾市 宮西 弥生  
黄金の馬で出番を待っている  
しごかれた今日一日の手を洗う

東大阪市 竹中 綾女  
恙なく年を越したに今は寡婦  
夫と子の有難さ知る告別式

大阪府 有信新之助  
どう見ても男は要らぬ美しさ  
要求は願いのかたち鉢巻し

唐津市 岩崎 実  
もつれ解けば姑と私の糸切れる  
羽曳野市 麻野 幽玄

神戸市 和田 恭子  
土地売った金には汗のしみがない  
水仙よ忘れることのむずかしさ

島根県 榑原 秀子  
流行人の木枯色は不況色  
愛すべき悪党にする母性愛

大阪府 那須 鎮彦  
森脇 善彦  
橋本市

不況風いくつ弔う除夜の鐘

島根県 堀江 芳子  
グラス満たして真白い冬見つけた

京都市 都倉 求芽  
晴着着て出る日は家計忘れよう

倉敷市 藤原 健二  
足組んだブーツの先のもの想い

倉吉市 今村 夕路  
カンガル―矢張りお前は過保護だな

宇都市 樋村 天流  
窓口に表情もない離婚処理

島取県 広富 白峰  
そうなかか鎧を着けて身構えよう

神戸市 来住タカ子  
視野の中嘘ころころと

岡山県 直原七面山  
紅つけた少女に冒険心が湧き

新宮市 大矢 十郎  
これ蝶よこんな小さな庭に来て

山口県 高崎 雀声  
自衛隊アベックでパチンコしてござる

岡山県 池田 半仙  
石仏の風化虚しと云うまいぞ

大阪府 欄 蘭  
姑になって老妻気がつかれ

島根県 堀江 正朗  
手に受けた轂は昔のまま丸い

尾崎市 黒川 紫香  
身心を脱落させて枯野行く

八尾市 大路 美幸

雪ぞ降る真つ逆様に母が降る

唐津市 田口 虹汀  
そつと抱く皆それぞれの一言

唐津市 三浦ひろ坊  
これはこれはポックリ寺の支院支所

和歌山市 津田 与史  
夜明けて女の本心動き出し

唐津市 筒井 朴竜  
一浪の入試は策に溺れそう

岡山県 嘉数千代香  
死に絶えた故郷に柿の木がいつぱん

東広島市 佐々木玲二  
母の笛合図に皆が動き出す

和泉市 西岡 洛酔  
善と悪小さな扉の外で舞い

松江市 梅本登美也  
バス無言少年院の坂登る

羽咋市 三宅 ろ亭  
伸びた爪じつと見つめる失意の日

京都市 松川 杜的  
カレンダーのこども一月を雪の富士

生駒市 草深 醉升  
ベビー車を足でたたんで特急車

唐津市 山下 勝一  
暖冬異変おたまじゃくしに足が出る

岡山市 砂田 静佳  
おし鳥の片羽根落ちてうずくまる

和歌山市 若宮 武雄  
水仙の匂いの中に初春の海

和歌山市 松原 寿子

胸の内春のポストに読み取られ

大阪市 西出 一栄

早春の月ビルの谷間をのぞき込み

岡山県 出原 敬一

胸襟をひらくと言葉が温うなり

大阪市 本庄 金三

坐禅組めば上級校へ行けるかも

神戸市 宇佐美和子

選ってこない少年三月には私

大阪市 北 勝美

三輪二上一直線に陽はのぼり

堺市 玉井 邦晴

子の顔が見たいテレビの座談会

豊屋川市 宮尾あいき

物価高並に孫へのお年玉

伊丹市 榎谷 寿馬

父の無い子はサイダーの栓胸に

高槻市 若柳 潮花

絵舞台出番になれば歳をとり

富田林市 中村 優

説教で耳を鍛えた宮仕え

大田市 藤田軒太楼

本番のふるえ逆立ちやってみる

堺市 片山 敬三

初詣願いは一つ日本髪

岡山市 井上柳五郎

もう底と言う不況からまた沈む

今治市 矢野 佳雲

お粗末なメモを綴ったように生き

大阪市 江城 修史

青い鳥妻人生を語らない

唐津市 桧垣 岩光

エンジン止めて地図見て道路間違える

唐津市 新岡回天子

誕生も来ぬ孫反対だけははつきりし

今治市 関部 正則

〇〇白書役人どもの暇つぶし

貝塚市 行天 千代

旅先で次の旅行のプラン練る

倉敷市 中津伊勢吉

つぶやいてやる気をおこす左遷の地

岡山市 清水金太郎

寝正月すれば足腰痛くなり

倉敷市 斎藤 通風

尻馬に乗ったが後は落し穴

唐津市 田中 紫浪

呑めぬ僕君はどんどん呑んでくれ

東海市 小山 悠泉

子を庇う気の妻の嘘叱るまい

西宮市 朝山千世子

小雪舞う欲の人波初えびす

宝塚市 吉田 笑女

初詣孫が両手にぶら下り

八戸市 小泉 紫峰

洗濯の妻が喜ぶ冬の天

出雲市 板垣 夢酔

化け物も慌てて逃げるアイシヤドウ

岡山市 串田句味地

冬の蠅逃げぬつもりか逃げもせず

〔評〕白星さんの句、小説にしろ手紙にし

る真実をむき出しに述べたものは、文章とし

ての体裁上、意に添わず屑籠へ没にしたと云

うのである。多少の虚飾、文章の綾というも

の必要さを認識させてくれる作品、穿ちが

高度だ。甲吉さんの句、「悠然と泰然と」の

表現など作句力の充実した作者でないに陳腐

に陥り易いのだが、流石と思える程に句格を

高めている。枯木の姿が作者自身に感じられ

て来る。千万子さんの句、正月三カ日は総て

の人が心あらたまると共に、はじめを正しう

する時でもある。男女の別があやふやに感じ

られる世相が句の裏にはつきり指摘されてい

る。鯛牙子さんの句、サラリーマン気質であ

る。忘年会か新年会か、上役も席に列なる宴

会のうちは沈黙は金を旨とし、仲間だけにな

った二次会に至って互いに本心を吐露する。

つき子さんの句、鈴が鳴り止まずという語か

ら、それは心の琴線に触れる恋に関わるもの

であらうと想像される。君子さんの句、狂い

咲きより返り咲きの方が適切かも知れない

が、作者は狂い咲きという強烈な言葉に感応

されたのである。時期を外れた開花に、花咲

爺が夫であったところに家庭の主婦の複雑な

心情を感じる。美代子さんの句、この作者と

しては珍らしい情を託した作品で、心の動き

そのままを率直に述べた力強さを教えられる

んは取り上げたのだから、これも作者の個性が出て

—水煙抄—

# 秀句鑑賞

—前月号から—

高杉 鬼遊

昭和五十年六月号から水煙抄の秀句鑑賞を担当してきたが、巻頭を飾る方の句も、一句組の方の句も、常に同一線上で選んできた。巻頭の句を第一番目に採ったのは今回が初めてだ。

真四角にとられ人の空がある

納 史葉

これは心象表現で別に難解句ではない。律義な作者の生きた姿が見える。下五に明日を希う切ないものを痛感する。他の四句にも、それぞれ思いの重さがあり佳句揃いである。

仕事場の埃は仕事場で払い

船越 汽水

さりげない表現ながらうがちの深い生活詩である。平凡の底に非凡な作者の眼が光っている。「札束の」句は理に勝ちすぎるが「手土産の」句は共感があり人柄が伺える。今後活躍が楽しみである。

飲みすぎただけが暮しに毒な酒

飯塚 虎秋

「暮しに毒な」この表現の屈折はユーモアを誘い見事で、味わい深い佳句である。先生の都合で薬漬けにされ

池田香珠夫

健康保険の初診料が今年から六百元になった。上った分だけ余分に薬を欲しがる患者、薬を沢山出して人気と金を儲ける医者時代の、笑い話の過去へ一日も早く追放したい。電算器の間違い双方気が付かず

森山健太郎

世の大方は機械まかせ、人間の判断が入りにくくなってきた。「器」は「機」でなければならぬ。意識したとは思われないが、これにも錯綜したユーモアがある。粉にまでされてお米は嫌がられ

福富 隆子

瑞穂の国の喜劇である。米の粉の入ったうどんとは、お上の考えることはこんな程度なのか、情けない時代である。汗で得た銭は物価に届かない

池田 半仙

正直者が莫迦を見る。今更あぶ銭も意に反する。味方になってくれる天の神も商売替えをしたかなか現れない。しかしこつこつ実直に働くより方法もなさそうだ。割勘の箸はせかせかよく動き

加藤 茶人

実に世知辛い世の中である。当然の権利として義務を果たさねば「弱肉強食」食われ

放しになりかねない。

五十階ビルの非常をどう逃げる

矢野 佳雲

誰もが思う不安を問いかけの形で表しているが、自分に対する問いとみる。科学技術が進みすぎると破壊に向うのではなからうか、小心者の恐がりではなく、人格的な恐怖である夫婦ということすら忘れさすワルツ

宮尾みのり

やはりムードに同化ししやすい女性の感覚である。夫は醒めた意識で職場の若い娘を連想しているか判らない。妻は妻なり夫のそんな心の髪を暴かない方がよい。雑兵に紅一点を引き抜かれ

松田宇宙太

鼻をあかした雑兵の痛快さが湧いて来て愉快である。サラリーマン倒したやつに拍手する

高野 不二

被害者同志の連帯感だらう。同病相あわれむ現代風刺。負け犬の拍手が聞こえてくる。大根に合ったブーツを買って来る

欄 蘭

流行に弱い女性に対する風刺であるが、近頃は男性も偉そうに言えない状況である。妻よお前もブーツを買うか。あなたからあなたになって子が二人

岩田 三和

何の説明もいらぬ平易な表現で、新婚から二人の子持ちになった夫婦の歴史が語られている。

## 川柳塔社新理事

# 初顔合わせの会

— 53年1月22日（大成閣）



加藤貞山氏（鳥取県・理事）が地下鉄梅田で乗車券を買っているとき、うしろから「貞山さん」と声をかけられ、ふりかえると柳宏子さんだった。

「うれしかったですね、この広い大阪で、同じ会場へ行く人に会うなんて、これが川柳というもんですな」

無鬼さんも貞山さんも篠山、鳥取から来るときは雪を踏んでこられたそうである。ご老体といっってはお叱かりをうけるかも知れないが、七十を越した方々のこの熱情こそ、これが今の「川柳塔」だと思った。

遠山可任氏（兵庫県・理事）は現在無鬼氏の片腕として「ささやま」の編集や、その他に活躍されているが、この日、無鬼氏が帰えられるとき、美声無鬼氏の「デカンショ」に合わせて「踊り」を披露された。軽い手さばき、身のこなしは、相当の年季をかけられたものであろう。

高鷲亜鈍氏（本社顧問）は令息亜成さん、手を引かれてのご出席である。氏から文筆という「武器」を奪った「目」が川柳塔にとっても大損失である。

藤村メ女さん、天正千梢さんの紅二点や、出席名簿にあるように珍しい方々のご出席42氏が一堂に会して、明日の川柳塔をテーマにみんなで話し合う二時が来た。

討論というような文字を避けて、敢えて話し合うとしたのは、この方が川柳塔社にふさわしいと思ったからである。

まず生々庵主幹が「あいさつ」をされた。何よりも健康第一で、その健康をもとに、川柳塔の繁栄をみんなで築きあげていきたいと柳人医博らしく「活」を入られた。

栗副主幹はハンドマイクを手に、「今日はシンポジウムですけれど私は皆さんの討論を司会する役ですから、活発なご意見をディスプレインしていただいて……」

一月二十二日（日）午後二時から、心齋橋の北京料理「大成閣」で、こんど新しく理事になってくださった諸氏との初顔合わせの会がもたれた。

小西無鬼氏（兵庫県・参事）が元気な姿を見せてくださった。ちょうど栞氏と一三夫が早目に出席していたのでお相手が出来てよかったとおもう。

と、柳宏子さんにマイクをわたし、発言される人々へマイクが飛ぶという進行ぶりである。

川柳塔の運営強化、倍加運動、支部強化、本社主催の吟行会、そのほか婦人部復活など建設的な意見が五つのテーブルから縦横に飛ぶところ、ファミリー川柳塔の姿がくっきり浮きあがる。



川柳塔社創立当時、まず「支部」問題が大きくとりあげられた。いろいろ論議された結果、

「支部を強要せず」

「求めて来れば反対せず」

このようなことの申し合わせがあった。その後、島根の「むらくも」藤井明朗氏、松江の「まつえ」岡崎祥月氏、から支部認可の申し込みがあった、これを常任理事会がOK、今日「ささやま」小西無鬼氏、「菜の花」西尾葉氏」とづいていくわけである。

なぜ、支部を強要しないかと、いうことになるが、これは、各地方のグループにはそれぞれ立場があって、××支部よりも、××川柳会、または××川柳社としたほうが、会または社の個性が（ローカル・カラー）が出るからである。

このように川柳塔社の傘下ではあるが、支部を強要しないのは本社の親ごころとして受けとっていただけだろうか。「和」を第一信条としている川柳塔の素顔がこれなのである。

運営強化のため、賛助会員を復活させてはという、まことにありがたいご意見も出た。主脳部では、あまり同人諸氏にご負担をかけぬよう腐心しているのでノドから手が出るご提案には感謝申しあげている。

若手起用—これは川柳にかきらず、各方面でも言われていることである。ただ、川柳という「結社」のむずかしさをよく見きわめて

からでない、急速にもの運ぶのは危険かも知れない。（現在、誌面にも若手進出が表面化していて、旧「川雑」時代とは雲泥の差がある）

広告の分担は、それぞれの沿線の方々をお願いした。これは年に数回というのが大半なので、そのつど庶務のほうからお知らせすることになる。よろしく願います。

婦人部復活も、日ならず発表できるとおもふ。吟行の件は別掲のとおりなので、一人でも多くご参加いただきたい。

楽しく大きく輪をひろげる—こんな川柳塔になるよう、みんなで話合った有意義なつどいであった。文学か—運営か—問題は大きい、二時間にわたる、熱気の中にも和気あいあいの話合いがすめば、五卓にわかれての祝宴となる。

各自の自己紹介が輪から輪へ移って行く。そんな中で村田瓢太氏の奇術も披露され、こここまでくると、川柳塔一家族の和ごやかな笑い、大成閣の大広間を湧かせる。

出席—葉・一三夫・無鬼・萬的・鈍鉈・笛生・敏・与呂志・柳志・ゞ女・亜鈍。（付添い亜鈍）凡九郎・武助・春巳・白溪子・古方・太茂津・瓢太・雀踊子・吸江・酔々・文秋・美房・百酒・小松園・貞山・漫柳・滋雀・水客・可住・生々庵・柳宏子・薫風・ゆきを・千梢・一二三・客遊子・重人・鬼遊・牧人・天笑・葉子。

（ペン・一三夫—カメラ・萬的）

# 音のない世界に生きる

— 柳原静香さんと北野久子さん

## 不二田一三夫

光りを失った人もいるが、音のない人もいる。こうしたハンディを背負わされた方々が川柳によって強く生きていく。

柳原静香さんと北野久子さんにご登場ねがい、そのたくましい人生記録を身障者の方々にも読んでもらい、強く明かるく生き抜いて



柳原静香さん

いただくため本号の特集とした。

### 柳原静香さんの場合

静香さんは大正七年十月二十五日に長崎県諫早市に生まれ、県立高女卒業後、生家の雑貨商を手伝い、昭和十六年に現在のご主人と結ばれた。

昭和十六年といえば、米英加三国が日本資産を凍結、開戦、真珠湾攻撃、と多難な年だった。いろいろ曲折があったこととおもう。昭和四十五年秋、ご主人の長兄、柳原三多楼氏（番傘）が、愛媛県大島から来阪したとき、静香さんの隣りに住む小出智子さんの色紙を見て

「お隣りにこんないい先輩がおられるのだから、川柳をやってみないか」

と勧められた。そこで出来た句を智子さんに見てもらい、三多楼氏に送り「汐風」への投句がはじまったのである。作品が誌面に出るようになったのは四十五年の十二月号から

だった。

静香さんは、川柳にはいる二十年前、当時尾道市外向島に住んでいたころ、汐干狩で指を傷つけ、その手当てが悪く破傷風になり、血清が間に合わずストマイを打ち続け、生命はとりとめたものの、耳が聴えなくなってしまうた。

打ち沈んだ生活がつづいていたとき、そのドン底から救うための三多楼氏の川柳案内となったのである。ご主人は洋服類の月賦販売を営んでいるが、静香さんの川柳には、最大の協力者となり、

— 二人三脚 夫婦で綴る愛の詩 51・4

の句が示めすように、いいご主人をもった静香さんはしあわせである。

四人の子宝を得、現在は二人が嫁ぎ、長男と次女の四人暮らしである。

四十八年一月号の水煙抄に  
— ワッペンをつくもの買うて孫を待ち  
本年やとと六十歳のうおあちやんである。

— 詩情喪失 久しく星を仰がない 48・3  
など、川柳のテクニクもイタにつき、同

年六月、文秋・一三夫推薦で同人になってもらった。

薫風氏の推薦での二賞候補に、  
— 車椅子の男 たくましき腕を持ち

と、観察力もすぐれている。音のない母親に、お子さんたちもやきやきつかえているが小学生のころの子どもさんが、学校からの用事を、筆談でする不便を母親としての静香さ

んにはつらいことであつたにちがいない。

外へ出ても話相手がなく、貝のように閉じこもつた生活だったが、川柳することによつて友達も出来、句会に出席しても智子さんの平手へ書く文字によつて自句の抜けたことも知らされ、ここに一人の女性が、女学生時代の明かるさをとりもどし、年よりも五・六歳は若く見えるのも生活環境からくるものであろう。

―聴えない哀しさ同窓会へ「欠」と書く

―飲めるならやけ酒飲みたい日もあつて

―隠棲をしたいような島がある

―耳のない暮らしに耐えて耐えられて

―閉された耳に真実だけがある

―もの云わぬものの哀しさ身に染めて

―きこえない耳を素通りする噂

―聴えない孤独を犬に話しかけ

―聴えない甘えが何日しか身に染まり

―聴えぬが心に残る唄がある

―難聴のハンディ夫が埋め合わせ

―孫の為聴える耳が欲しくなり

―雑音の聴えぬ耳を嬉しとも

―隣人の好意は手となり耳となり

―最後の句は智子さんへの感謝であろう。た

まに拙宅へも遊びに来てもらうが、智子さん

がついてきて、ぼくの云うことを手の平へ素

早くサラサラと指で書くと、笑つたりうなずいたりする静香さんである。

―還暦の夫へ妬く程の愛は持ち

―春の精夫婦に手などつなげる

このように愛し愛されるご夫婦もめずらしいのではないか。

北野久子さんの場合

北野久子さんが川柳へはいつたのは、まことに劇的で、静香さんのお嬢さんが、頭を手術するといふ大病になられ、毎日のように智子さんが見舞いに行つていたおり、その病院で北野久子さんと知り合つたのである。

智子さんから、静香さんが難聴を克服して川柳に打ち込んでいることを久子さんが知つたのである。

「わたしに出来るだらうか」

そんな不安もあつたが、俳句は以前から好きだった。しかし作つたことはないが、短詩



北野久子さん

形なら勉強さえすれば、と思つたのではないか。ぼくが始めて句を見せてもらった時、智子さんと一緒に見えたので、

「俳句か何か、やつた人ですね」

と、たずねると、やつていないという。そのときは「水煙抄」がすでに選者に回わつていたので、選者に連絡してぼくが選をさせてもらった。いきなり四句抜いたように記憶している。その後はほとんど三、四句という抜群の成績だった。

まだ川柳を始めて一年ほどだから、句は多くないが、

―聴えないから一心に毛糸編む

が、二賞候補になつてゐる、この人の句には闘志がひそんでいて、女性にはめずらしいフアイトの持ち主と見た。

―演技とは知らず夫慌てたり

―反抗もいもの夫ふとんを敷いてくれ

―嫁が来てけじめ一本とっておく

―倅せは心のもちようだと悟り

などがある。彼女は云う

「耳の悲しみのために川柳を始めたのではありません。好きでやりだしました。なんの音もない老後を思い、恍惚防止のための川柳勉強でございます」

ちよつと見たところは弱々しく思つたが、なかなかの根性の持主である。

昭和二年六月二日生まれだそうで、五十一歳という若さである。ご主人の両親と、息子

52 52 52 52 52 52 52 52

12 12 12 12 12 12 12 12

11 11 11 11 11 11 11 11

4 4 4 4 4 4 4 4

6 6 6 6 6 6 6 6

3 3 3 3 3 3 3 3

1 1 1 1 1 1 1 1

49 49 49 49 49 49 49 49

1 1 1 1 1 1 1 1

50 50 50 50 50 50 50 50

10 10 10 10 10 10 10 10

49 49 49 49 49 49 49 49

1 1 1 1 1 1 1 1

51 51 51 51 51 51 51 51

4 4 4 4 4 4 4 4

さんと夫婦と二十歳のお嬢さんの七人暮らしで五月には初孫誕生というよろこびが待っている。

ご主人は阪大病院の文部技官で、静香さんのご主人同様、久子さんの川柳には一家をあけて協力されているということである。この人もしあわせな方である。

少女時代の中耳炎の後遺症で十年ほど前から弱っていく聴神経と平衡神経のバランスの狂いから、激しい眩暈と吐気は八年間も苦んだそうである。そして六年程前に全聾になったが、根性のある人なのである、ご主人にも二人のお子さんにも、ついで泣き顔を見せたことがないと言ふ

「身は障害者になっても、心までは家族のために障害者でありたくありません」立派なものである。

―落ち着きましたよ 全聾になりました

―聴えずとも心の窓は開け放つ 52・10

この人も河野君子さんや小出智子さんらのよき先輩に恵ぐまれ、いま楽しく川柳にいらしている。

―枯れきって仲よくなった老い二人 52・8

ご夫婦仲も円満である。

―好きな人の特長 鏡でそっと真似 51・12

ユーモアもあり、末が楽しい作家である。

柳原静香さんも北野久子さんも川柳塔の異色

作家として、かならず大成してくれるものと思っている。ハンディがあるため、毎月出句することはむずかしいとおもうが、気がながく

## 古川柳現代解釈法

香川酔々

俳風柳多留全五巻（岩波文庫）パツと取り出すと第三巻、パツと開くと十五篇、安永九子年刊とある。そこで、この中からアトランダムにとり出して現代解釈を試みましょう。

安永九年は一七八〇年であるから、現在より一九八年前である。光格天皇の御代で將軍家治の時代ということになる。文化人では堀保己一、本居宣長が生存活躍したのである。

金借りに白水またぎく行

白水とは米のとき汁のことである。長屋のお上さんが、井戸端の米のとき汁をまたぎまとき、金借りに出掛けるという光景である。現代もこの通り、お上さんはサラ金へ、出かけるのである。更に言えば、サラ金地獄の門

川柳をしてほしいとねがう。

そして、句集を出してほしい。誰にも作れない句集が出来るとおもうからだ。

にはいり、白水越えるどころか、血の池地獄で、親子心中という結果さえ生れることは、読者諸賢熟知のことである。よくよく心せよと、先人は、かくのごとく名句を残してくれたのである。

血達磨を十七人が寄てはめ

この句の血達磨とは何かというと、時事放談でお馴染の細川隆元氏の御先祖にかかわる物語である。細川家に出家があった際、大川友右衛門とかいう土が、猛火の中を潜って宝蔵の中の、細川家、家宝の達磨の一軸を取り出そうとしたとき、火につつまれ、割腹して軸を腹中に納めて、完きを得たという話である。十七人とは、細川家へ預けられた大石以



下の赤穂浪士、同じ忠義の心から、血達磨の軸に伝わる大川友右衛門をほめたということである。戦前には、御真影（わかるかかな？）をある小学校の校長が猛火の中から、とり出し、自らは全身火傷で亡くなったというような話もあったが、現在では、稀有のこととなつた。しかし二、三年前、阪急の駅員が、乗客を救出、自分が犠牲になつたという事実がある。時には、すばらしい人間が居るといふことを、先人はよく洞察したのである。

#### 佃島女房は二十筋数え

時代劇には、この佃島という名がよく登場する。隅田川の川口にある島である。当時佃島には漁師ばかりが住み、白魚が名産である。佃煮の語源はこの地名に由来するそうである。今の隅田川は、白魚どころか黒魚でも御免という御時勢である。白魚を教えるのにひとちよぼ、ふたちよぼといったそうだが、ひとちよぼは二十一匹である。女性の咨さから、二十でひとちよぼと一匹けちつて、売るのである。現代では大メーカがよくこの手を使う。スパー用のビスケットなど一枚足らないまま、包装するのである。まさに佃島の女房にも劣る根性なのである。

#### まん中が出ると楽天腰が抜け

謡曲「白楽天」によると、唐代の大詩人白楽天が、日本人の智をためそうと、舟路遙かに我国を訪れる。ところが玉津島明神が老漁

夫に姿を変えて現われ、問答の末に追いかえたという。玉津島明神に問答してただかなくとも、衣通姫（そとおり姫）に出てもらえば、その玉のような美しきで、白楽天は腰を抜かしたろうと川柳子はいう。弁恭天皇の寵妃で、和歌三神の一に祭られた衣通姫は、すばらしい美人で、玉の肌を衣を通して見えたといいことである。男性にとつてこんなすばらしい姫はないのである。「くらやみへ衣通姫は穴をあけ」という句もあるくらいである。

では現代ではどうか。なに白楽天くらい、ピンクレデイのお色気蹴りで、腰を抜かすどころか、東支那海を越えて中国まで、蹴り返されるであろう。ころみに、チャネルをひねってごらんさい。どこかの局で「ウオンテイド」とさかんにあはれていますから

#### あやかしがついて屋根舟堀へ漕ぎ

あやかしとは、海上にあらわれる亡霊、すなわち船幽霊のたぐいである。これが転じて一般に亡霊、妖怪などのことになる。謡曲の「船弁慶」に「此御舟にはあやかしが付いて候ふ」とあるが、これを用いて、舟遊びをしていた連中が急に吉原に行くことにきめ、山谷堀に舟をつけさせるのをよんだ句である。現代解釈法によれば、大臣に就任の際は、実に強気に国民サイドの発言があるが、どこ

かの会長のあやかしの一喝で、忽ち腰くだけとなり、優遇税法をやめるなどと言つたことは、途端に口をぬぐい、国民を乗せた船頭はよからぬ所へ漕ぎ寄せてしまふというきわめてうがちに富んだ句といえよう。

#### お竹殿どうだと凡夫尻をぶち

お竹さん、今晚どうだつきあわないかとポンとお尻を打つ男。ところが、このお竹さんそんなところのお竹さんとお竹さんが違ふ。もつたないなくも、大日如来の化身であつたという。仏さんの頭を撫でるのは聞いたがお尻をポンとぶつことは初耳ですね。その道の人とも知らず法を説きなんて句もあります。人を見ろということは現代も立派に通用します。我々も注意して、清い一票を投ずることしなければ、このお竹さんのお尻をぶつた男とそう違いはなさそうです。

#### 死んだまゝ六部を置いて境論

どうです。涙が出るような名句でしょう。江戸柳人は、なんとすばらしい句を詠むのでしょうか

行倒れの六部の処置を迷惑がって、その現場の管轄境界の争をする町役人。書類を持って行けば、これはあつちの窓口とつっけどんに返される役所の窓口、まあこれは小さいことですが、国と国になるとそうはいかない。干戈も辞せずということになりますからね。桑原々々。

# 榎谷漫柳還暦句会

昭和五十三年一月十五日  
阪急グランド・ビル

六十一まだ情熱は燃えに燃え 路 郎

漫柳さんは、還暦句会を「成人の日」に持ってこられた。情熱は燃えに燃え—を、その句会開催日によって示したものである。

「一月十五日にはぜひ出席してください」と早くから予約されていた。ご承知のようにぼくは本社句会と年一度の大萬川柳大会だけに出不ないので、漫柳さんから堅く約束をさされてしまったのである。あとで書くが、漫柳さんの川柳入りの身元保証人？がぼくになっているのである。

さて、漫柳さんを祝う一月十五日、梅田界わいは和装で着飾った若い女性で花がパツと咲いたような明かるさだ。

会場入口で柳宏子さんが案内役をしてくれていたので、さすがの方向音痴も今日ばかりは迷わず会場へスナリ行けた。26階のエレベーターはみな通過で31階まで上がり、その

まま26階まで降りてくるといふ大混雑だ。

高層26階の会場は、司会の鬼遊さんが云うように、おそらく日本一、高い句会場かも知れない。

定員30名ということだったが38名のご出席とのことである。

大阪市内が俯瞰一望という見晴らしだ。正にワンダフルだ。そんな雰囲気の中で、こんな会話ははいってきかた。

「アレ！」

「どうした？」

「川柳塔の句会だろ」

「そうやがな、それがどうした？」

「選者の先生方の雅号に川柳塔色が薄いようにおもう」

「華」 時実 新子 選

「宴」 室田 千尋 選

「寿」 海士 天樹 選

「馬」 橘高 薫風 選

「そういえばそうやね……」

「句を作り直さなアカンな」

「そんな器用なことが出来るか」

「出来んけど、どうせ全ボツになるのやったら、一丁、挑戦するか」

と、悲壮？なやりとりもあつた。川柳塔一本の人にはやや苦手意識があつたようだが、成績などは二の次ではないか。今日は漫柳さんの還暦を祝う句会である。ぼくは「川柳展望」の時実新子女史に二句拾っていただいたが実をいうと会場で作直した分である。

まず祝詞が「ふ社」の光森良氏。光森良氏と漫柳さんは、どんな関係があつたのかと聞いたら、初対面だという。共に兵庫県在住というよしみからであろうか。次ぎに川柳塔の菊沢小松園氏が祝辞に立って、還暦のいわれなどどううまく結ばれた。

漫柳さんの謝辞は、この人らしく好感がもてたし、愛妻郁子さんのオノロケも適当にはほえましいものがあつた。

花東贈呈はお孫さんである。漫柳さんの次女、古林優子さんの可愛い令息、満之ちゃん（三歳）から花束を受けるおじいちゃんは、いよいよ相好をくずし、ここに人間、榎谷漫柳を見るような気がした。

はじめに書いたように、漫柳さんを川柳の世界へ案内したのはぼくだった。氏の実姉の夫君というのが、ぼくらの仲間の一人で、かつては故秋田実先生の門下であった。故今東光先生の添書を持ってきて、漫才作家くらぶの一員となつたのだが、この義兄という人は笹川良一氏に師事し、ぼくとは妙にウマが合つた。漫柳さんはこの人に連れられて川

柳塔社へ来たのである。

「文才もあるし、いい川柳家にしてほしい」とのことだった。漫柳さんが旧軍人だったことや、会社の社長さんであることも何も聞



漫柳さんを祝って集った人々

かずじまいだった。漫柳さんらしい、またはくらしい初対面だった。

ちょっと私事へ外れてしまったが、句会がおわって祝賀の宴は27階の中華レストラン白楽天で催うされた。こここまでくると、柳宏子・天笑といった人たちのペースになってくる。さあ、飲めや、唄えやの天国だ。

ここでは「川柳は一つ」である。まこと楽しいひとときであった。

漫柳改め寿馬（かずま）さん、おめでとう。

祝吟

還暦を成人式とまちがわれ  
 寿馬をうつ鞭は川柳十七字  
 瑞瑞しき若さへ還る第一歩  
 白寿までこの柳縁のもつ絆  
 新しい背広に着替え若かえる  
 寿暦いまいちばん花が匂う春  
 還暦に生れ変わった顔洗う  
 墨痕淋漓寿とただ一字  
 拍手盛ん今日人生の三幕目  
 還暦へ過去の命へふり向かぬ  
 今日からは0才になるありがたさ  
 還暦に松の廊下をふり返る  
 男一匹還暦に翔ばんかな  
 還暦のさあこれからという若さ  
 グランドで仔馬に還る六周目  
 野火消えず六十激しいものをもつ

葉風 光穂 天樹 牧人 百酒 眉水 小松園 柳志 雀踊子 敏 新子 夢草 柳宏子 幸生 美幸

還暦の男いよいよ光り出す  
 還暦の明日へまだまだ燃えるもの  
 還暦や大阪城を掌にとつて  
 還暦の心へきせる朱の衣  
 還暦の青年に似合うベレー帽  
 還暦の心を染める初日の出  
 還暦の硯へくぼみまくるあり  
 まっすぐに杉は若さる失はず  
 漫然と揺れる柳に芯を見た  
 おだやかに六十路をてらす幸に酔い  
 還暦へまだ出走馬の意気を持ち  
 還暦のまだまだ登る男坂  
 ロマンズグレーだけが還暦うなずかせ

夕花 史葉 酔々 君子 花梢 美代 静歩 千尋 良 太茂津 幸 秋 文 幸 秋

(指・一三夫一自・岳人)

# 女の子

垂井千寿子選

日本間で帽子を気にする女の子  
 母樂し女の子を飾りたてふみ生  
 先生も家に帰れば女の子敬  
 流行語よく飛出す女の子ハルエ  
 可愛さが金をかけさす女の子ますえ  
 母さんが特訓してる女の子木魚  
 女の子弱そに見えて芯がある恒治  
 女の子学より顔を大事にし拘治  
 短大の学歴ほしいだけ女の子保夫  
 女の子ひとり門限きめておく重人  
 女の子ジーンパンという坐りよう竹馬  
 女の子を産んでよかつた老後の日芳征  
 女の子ばかり肩身をせまく産み右近  
 赤電話いつ迄待たす女の子勝美  
 女の子だけを連れて出る離婚富人  
 産む産まぬ採めたと知らぬ娘の育ち茶人  
 女の子母親のスタイルも気にし不二  
 女の子見様見まねで母の留守花子  
 女の子父には言えぬことあり実  
 母親のしぐさも似てる女の子越浪

嫁ぐ日が今から惜しい女の子秀村  
 君らの喋りソブラノだから困るんだ古方  
 時々はおぐらもかいて女の子七面山  
 父親を上手に使う女の子素身郎  
 ママの見栄着せられている女の子度  
 私の轍踏まないで欲しい女の子綾女  
 女の子ママのセンスが気に入らず悠泉  
 再婚をゆるせない瞳の女の子邦晴  
 写真撮るポーズが女の子にさせる可佳  
 甚六に欲しい女の子の勝負気軒太楼  
 犬抱いて愛に餓えてる女の子メ女  
 恋人が出来て女の子に戻り凡太郎  
 女の子篋の殻に嵌めこまれ宵明  
 初春を撫子となる女の子どんたく  
 玉の輿信じる日がある女の子惠美子  
 デモ隊の女の子別な顔となり夕路  
 焼蕎麦を交代で買う女の子伊津志  
 女の子ほしいと思う女の子秋女  
 女の子使いにやっと思着かず本蔭樺  
 もう母を同性に見る女の子同  
 女の子年が云えない年となり善四郎  
 女の子それまで父と湯につかり無人  
 女の子母に味方のつづり方千代香  
 女の子男性論に気が合わず漫柳  
 年頃の娘と父に距離ができ正則  
 らしくと言うのが女の子に入らず満津子

# 祝言

嘉数千代香選

女の子母のあかぎれいとおしみ佳雲  
 何よりも孤独がこわい女の子惠美子  
 女の子美しきものへ妬心持つ道子  
 軸  
 ママの青春理解出来ない女の子

祝言を早める秘密探がし当て正則  
 祝言がすめば花婿もう敷かれメ女  
 祝言の連続三夫婦の渡橋式句味地  
 祝言のすこし妬いている披露宴軒太楼  
 祝言に恩報一役買って出る登美也  
 祝言を親が急かした深い仲花子  
 駆落ちと云う手で祝言挙げました春日  
 瞬いて祝言を聞くシャンデリヤ百水  
 祝吟を一句吟じて汗を拭き七面山  
 紋付を着て祝言のコマーシャル古方  
 祝言へ先ず体調を娘にたずねカズエ  
 祝言のご神酒お腹の兒も酔わし近江  
 祝言へ友は際どい事も云い善四郎  
 再婚は祝言の席子も並び満津子

吟 題 課

祝言の盃今更の顔で酌み どんたく  
 祝言へ無神論者も暦買う 金太郎  
 祝言をしてから女強くなる 弘朗  
 祝言して留学を許るさる 規不風  
 祝言へもう親せきの顔で酌ぎ 代仕男  
 祝言を挙げるとたんば一つ減り 悠泉  
 昇進の祝言痛いことも交ぜ 翁童  
 祝言へ親子ちがった夢を抱き 俊風  
 お祝いの言葉お膳の鯛も聞く 秋女  
 祝言はハワイ日本で離婚する 竹馬  
 祝言の馬が通った松並木 宵明  
 祝言の朝仏間の灯へ座る 重人  
 祝言は挙げぬが金婚式迎え 綾女  
 寿なれや謡いおさめた酔心地 ひろ坊  
 祝言の帰りとわかる包提げ 紫浪  
 祝言に父の涙はそつとふく 越子  
 祝言が二つ重なるいい日柄 里風

祝言はモンベと国民服でした 本蔭樺  
 祝言の父寂しげにかしこまり 夢酔  
 一票が欲しい祝言堂に入り 優里風  
 美しい嘘祝言へ花を添え 素身郎  
 祝言の蔭に泣いてる人もいる 里風  
 祝言へとられたような気で坐り 凡太郎  
 祝言の時秀才にしてもらい 方大

桃

三井醉夢選

祝言の今日から登る夫婦坂 洛醉  
 昔むかし桃はどんぶらこと流れ べ女  
 桃太郎ほんとに生れそうなモモ みのる  
 桃の花さして童の頃を恋い 越子  
 愛嬌も共に買いたい桃娘 たけ志  
 母一人娘一人祝う桃節句 右近  
 桃を切るそつと期待をこめてきる 度  
 満州の桃が恋しい花畑 弘朗  
 桃の花見頃と母の便り来る カズエ  
 寝たきりのベッドを慰やす桃の花 軒太楼  
 桃の花ここでリュックが軽くなり 木魚  
 紙難で済まず団地の桃節句 春日  
 桃便り二浪は春を待ちかねる 悠泉  
 桃活けてこの縁談も気に入らず どんたく  
 桃の花一枝だけの核家族 優里風  
 桃節句主役へこぼす白い酒 凡太郎  
 ふるさとの味を白桃から貰い 本蔭樺  
 好物の桃缶ばかり来る見舞い 不二  
 さわらないで下さい桃に指のあと 不二

# 初歩教室

題一「若」一

本田恵二朗

自分の歴史を、自分の好みの糸で織り続ける、そんな人生ならさぞかし楽しいであろうと思う。家族たちと仲良く協力して、織り継ぎ合うことも人生をゆたかに平和にする源泉となるであろう。家族のそれぞれが、それぞれの好む糸で、家風なども交ぜながら、丹精込めて織り合うなら、錦とまではゆかなくとも、バラエティーに富んだ色柄が好ましく競なしてくるにちがいない。飽きずに織り続けることによって、それが人間形成の手段ともなつて、万物への愛情ゆたかな人間像が創造されてゆく。そこでわれわれ川柳人は、川柳糸という多彩な織糸を持ち合わせていることが、こよなき俾せであることに気付くであろう。その川柳糸の彩を増したり、織目を変えてみたりするバラエティーの楽しさを創造してゆく技能を川柳人は多分に持ち合わせているし、そんな能力を与え給うた神さまに感謝せねばなるまいとも思う私である。

- |     |   |
|-----|---|
| 善四郎 | 若日日にチャンス逃したお人好し<br>(チャンス逃し逃して若さ戻らない)                                      |
| 同   | 白の髪若さちらつく赤いタイ<br>(タイ紅く若さちらつくロマンスグレ!)                                      |
| 頼次  | 気だけは若いつもり老眼鏡<br>(若い気が老眼鏡を置き忘れ)  |
| 茂美  | 厚着せぬこれが若さというものか<br>(三寒四温薄着で通すのも若さ)  |
| 静江  | 若者がシルバースhirtで猿寝する<br>老大家若さのひみつにじみ出し<br>(にじみ出る若さ若さを耐えず)                    |
| 柳五郎 | (耐え抜いた年輪若さを失わず)<br>すりへらす神経と指す若白髪<br>(神経の使い過ぎだよ若白髪)                        |
| 正則  | 腹立てる年寄まだまだ若さ持ち<br>(腹が立つのも若さだよおじいちゃん)<br>先生の若さに園児活気見せ<br>(保母さんの若さへ園児飛び跳ねる) |
| 同   | まだ若い気持ちがおじいに禍し<br>(まだ若い気持ちがおじいに禍し)  |
| 昭治  | 若い時若買えよと子に教え<br>(若い時若買えよと子に諭し)  |
| 同   | まだ若劣足りぬか顔が若く見え<br>(若劣知らぬ顔だな若く見え過ぎる)                                       |
| 九二老 | 試験かな杉の若木に積る雪<br>(試験かな杉の若木が雪に耐え)   |
| 同   | 数え年百でもよい若さ欲し<br>(年輪は百でもよい若さ欲し)  |
| サヨ  | 若作りおでこの皺が承知せず<br>(若作り目尻の皺をなんとする)  |
| 同   | 若者へ仲間入りしてカルタ会   |
| 利美  | (カルタなら負けないわよと若返り)<br>離婚するたびに女は若返り<br>女とは化けものなんの若返り<br>(妻今年十年若く化けてみせ)      |
| 同   | 若造り照れ臭さそうな笑顔見せ<br>(若造り照れ臭さそうな笑顔見せ)  |
| 伊津志 | 若草が陽に感謝する色で燃え<br>(若草が太陽さんと笑み交し)   |
| 同   | 若造りのハイミスまだまだ夢がある<br>(ハイミスの夢の若さを笑うまい)                                      |
| 保夫  | 若者の主張止めても止まらない<br>(若者の主張笑顔で聞いてやり)   |
| 同   | 若者に教育勸語丸呑ませたい<br>(若者に教育勸語のませたい)   |
| 静江  | 受験勉強若さの寝姿あどけない<br>(勉強部屋若いうたた寝あどけない)                                       |
| 同   | 正しさと若さはいのち破れ殻<br>(正しさと若さはいのち破れ殻)  |
| 貞祐  | (正しさと若さがいのち破れ殻)<br>若やいで一本杖のスキート股破る  |
| 同   | 若やいで一本杖のスキート股破る   |
| 紫園  | 若いから無理がきくよと煽てられ<br>まだ若いつもりつりで歳をとり<br>(まだ若いつもりで選履祝われる)                     |
| 同   | 気にすなと言うから気になる若白髪<br>(若白髪気にはせぬがと気にかかり)                                     |
| 梁川  | 老悲し若返る菓までできず<br>(若返る菓もがなと思う宵)   |
| 同   | 若やいど声選履のクラス会<br>若者も魅力と妻の目受とめる   |
| 露杖  | 若者も魅力と妻の目受とめる<br>(若者も魅力と妻の目受とめる)  |
| 同   | 覺きて老妻五つ六つ若返り  |

(若返るつもりか老妻鬻買う)  
堂々と青年の主張わるびれず  
(青年の主張堂々胸を張る)  
新興街並木も若さ競い合う  
若作り鏡に邪心のぞかれる  
若竹のように育てと百カ日  
七転び八起きと若さを慰める  
(八起きだよ若いんだよ頑張れよ)  
若返り人事と重役の首を変え  
(重役の首すげかえて若返り)  
還暦の若さを老妻が気をつかい  
(還暦の若さが妻の気をもませ)  
筋道を通して若者村を捨て  
五つほど若く言ったら当たってた  
ばんやりと鶴折る指にある若さ

英子 同 翁童 同 無 人 同 同 幸

(ばんやりと鶴折る指の若く病む)  
飾らない言葉に若い自負光り  
(に直な言葉に若い自負がある)  
風を切る若い思想にゆきぶられ  
世代担う二十才の決意旺んなり  
(世代担うはたちの決意見直させ)  
若駒の嘶き朝露つんざきて  
(若駒の嘶き初日呼んでいる)  
若者について走つていきがきれい  
(若者の足にうれしうれしう負けている)  
若造りしてもやつぱり齢は齢  
(若造り三面鏡に嗤われる)  
その若さでは人生論ずる資格なし  
(人生を語るには若過ぎるよ君)  
明治の頑固兎角若者と折合わず

同 同 三十四 同 同 飄太 同 同

(頑固な明治めと若者につぶやかれ)  
男性もいるクラス会へ若作り  
若者のくせにと老いの捨て台詞  
(まだ若いくせにと老いの捨て台詞)  
無理してる若さを笑うダンス靴  
(若い気のダンスシューズがちとよるけ)  
思いきり若さが飛ばす雪けむり  
(処女雪へ若いシユプール直すぐじ)  
(処女雪へ恋のシユプール画く若さ)  
一か八若しやの策が図に当り  
若い氣でいても足から迫る老  
(若い氣の足へ老いがしのび寄り)  
若返り人事が投げた社の波紋  
(若返り人事の波紋に巻き込まれ)  
スリル迫う若さ命もなんのその

漫柳 同 同 三和 慶彦 同 同

## 雅号ぶつちやげばなし (165)

すいしよふ



くさふか

### 草深醉升

北川春果先生の御指導を受けて「川柳大阪」のメンバーになる機会を得て川柳の味を覚え本名の松茂に因んで翠唱とつけていましたが、句会では先輩である西岡洛醉さんの酔の字を貰い、酔升としたほうが川柳の雅号らしく酔升の升は書きようで竹と間違いやすいので、はじめ酔舛と書いたところ本社句会で金井文秋さんより、何と読みますかと問われ、辞典を繰って見ますと舛はセンなり、酔うてみだれるとあり、流石に文秋さんと今なお敬服しております。

(六十八歳)

題一快 3月20日締切 (5月号発表)  
宛先 岡山県倉敷市下津井一―九一三四

〒七一―

本田 恵二朗

来る三月末日をもって  
十カ年の歴史に一応終止符  
をうつこととなりました

### 関西奇術教室

校長 村田瓢太

大 萬 川 柳

「松」

入選発表

選者 川村好郎  
投句総数 三百五十一句  
入選 五十八句

盆栽の松が引立つめでたい日

堺 邦 晴

断崖の松のいのちがしがみつ

神戸 牧 人

松とれてわが家のリズム取りもど

東大阪 美 子

松並木土下座に代る排気ガス

大洲 暁 明

父恋し明治の気骨松のこぶ

八尾 鬼 遊

売家に松もいつしよに座り込み

和泉 東天紅

松籟に便りの来ない人想う

和歌山 幸

水引の松はめでたい話聞く

箕面 一本杉

松すきて旧友の賀状読み返えず

鳥取 露 杖

お手植えと松喰虫は弁えず

笠岡 古 庵

老松がお城の悲話を語りそう

岡山 金太郎  
這い松の耐えて息吹く幾星霜

大洲 郷 子  
気の合わぬ松葉もあつてもめてい

貝塚 つき子  
天性の雄姿のまま松枯れる

和歌山 太茂津  
盆栽の松は手足をのばす夢

和歌山 としよ  
松葉杖ついて老松なお生きる

寝屋川 度  
真直ぐな松を人間よるこぼす

倉敷 方 太  
若松を活ける娘めでたい日も決り

大坂 道 子  
老松が由緒ありげな寺にする

大坂 あいき  
樹齡には勝てず別離の夫婦松

尼崎 利 美  
元旦に寿き舞うや松づくし

大坂 喜 洗

敷かれてる松葉がめでたい鯛にする  
大阪 一 休

門松のない家ですが無事平和  
大阪 敬

背を低くして這松は強く生き  
大阪 満津子

松林抜けると不信消えてくる  
橋本 美 彦

精一杯生きる母子の松飾り  
大阪 清 人

天守閣バックに松は生きのびる  
和歌山 与 史

城跡の松外濠へよいポーズ  
郡山 カズエ

若松も活けてしみじみ除夜の鐘  
大阪 柳 信

めでたさを松の緑と分ち合い  
大阪 蘭

結ばれる二人へ松のみどり映え  
奈良 保 夫

松飾り小さいながらも夢を抱き  
東予 悠 泉

革新も伝統もない松の青  
八尾 美 幸

満月を老松出したりかくしたり  
八尾 美 幸

松籟を聞く初釜に身を正し  
岡山 静 佳

松に菊活けて花瓶も新春の貌  
西宮 百 酒

おごそかな式に青さを増した松  
ひねくれた松に興味がしてしま

米子 雄 々  
松の緑鮮かにして過疎すすむ

開発へ今では邪魔な松並木  
倉敷 素身郎

しきたりを姑が握って松の内  
富田林 花 梢

冬空へいどむ王者のごとき松  
松葉二三散らして雅を売る京料理

松葉二三散らして雅を売る京料理  
笠岡 桃 里

老松を切った崇りにある民話  
離婚した夫婦を笑う落松葉

コンピナートか青松だった涙  
老松の姿日本の庭にする

大阪 好 一  
まさか首吊るとは松も思つてず

鳥取 洋 々  
広重をさがしに来てる松並木

岩壁の松根性でしがみつ  
大阪 金 三

月が出て古城の松は詩になる  
倉敷 筒 子

松の枝いじめたのしむ人のエゴ  
堺 ミツエ

松籟と聞く長閑さに遠くいる  
福寿草我が家は松を従える

神戸 どんたく



人ノ句  
松づくし姑は下り松になる

地ノ句

松原 サヨ

腕張つてみても盆栽の中の松

天ノ句

神戸 どんたく

老松の幹に歴史を抱いた苔

米子 千代

傾いた家とも知らず松の色

選者吟

昭和五十三年度

ベストテン (一月現在)

一	千代	五〇	米子	一一	保夫	二〇	松原
二	花梢	五〇	富田林	一三	雄々	二〇	奈良
三	恵祐	五〇	堺	一四	柳信	二〇	東天紅
四	どんたく	四〇	神戸	一五	清人	二〇	米子
五	美幸	三〇	八尾	一六	善彦	二〇	大阪
六	与酒	三〇	西宮	一七	素身郎	二〇	橋本
七	和史	三〇	和歌山	一八	利美	二〇	倉敷
八	好子	三〇	大阪	一九	あいさ	二〇	大阪
九	筒子	二五	倉敷	二〇	露杖	二〇	鳥取
一〇		二二		二二	桃里	二〇	笠岡
					小路	二〇	寝屋川

昭和五十三年度第四回

「目標」ハガキにて三句  
締切三月二十五日

第五回

「離れる」三句以内  
締切四月二十五日

投句先

〒533 堺市堀上緑町一―三一七  
藤井一二三方 大萬川柳会

### 麻生路郎編 評釈 古川柳の味

八木摩太郎清記

且那寺くはせて置いて扱という

寺から里へという言葉がある。お寺へ招いてくれて、御馳走を喰べさせて置いて、住職のあいさつに、さてこのお寺も皆さんのお世話で、斯うして立派にやって行けるのであるが、この暮の祖師の忌日までに門の普請をしたいと思うから何分よろしくと寄附の話だ。それでは御馳走になるのではなかつたと云つても遅い。

旅立は二度めのさらば笠でする

別れの言葉を一人々に交わしてから、草蛙の紐をひき締めた。

「留守中は家族が無事息災でござりまするよ」に」と心のうちに念じながらも早やあぜの曲りかどまで来た。とうもろこしの葉に昼をさびしく鳴く虫の声がする。これでは別の別れだと思ふと何んとなく後髪がひかるる思いがして、ふりかえれば我が家のかどに妻も子も茫然としてたたずんでいる。今ならば白いハンカチでも振るところを笠が別れのシグナルとなる昔さながらの情景である。

辻斬を見ておはします地蔵尊

ばつと血腥が立った。新地の一刀がためされたのである。無法者は兇爾として笑つた。刀は再び鞘におさまった。六道能化の看板を掛けてござる地蔵尊が、それを黙つて見てござるというところに皮肉がある。  
心太ひよろ／＼とかしこまり  
心太を人間にたとえた句だ。ところてん押しから出た心太は血の中へひよろひよろひよ

ろといかにも人間のようにかしてまつたと見たのである。面白い見方だ。心太をこんな滑稽に見た句は外にない。

隣からひっさげてくる猿廻し

隣から隣へ、一軒一軒、猿廻しが廻る。そんな時には猿廻しは猿を肩にのせずに、何か荷物でも提げないように、ひっさげて隣の家へ這入つてからひよいよと投げ出すのである。道具方岩をちぎって涙をかみ

芝居の道具方が涙をかむのに岩をちぎってかんだ。岩がほんとの岩だったらちぎれもしないし、涙をかむどころの騒ぎではないが、紙で出来た岩だったのでそれをしたのであるが、なんでもないしぐさの中にその正体が露頭してしまつたのもおかしければ、道具方が真面目くさつて涙をかんだのが滑稽にも思われたのである。

# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼生々庵主幹を中心に一月二十二日二時から心齋橋大成閣で新理事初顔合わせを兼ねた新春懇親宴がひらかれた。四二名の盛会。本誌参照。

▼52年度「いずも賞」作品は「背信の胸につららが突きささりー吉岡きみえ」と決定。会長は尼緑之助氏(本社・参事)

▼第2回川柳高知賞は「タイムカードいらぬ農夫の陽を相手ーほか、池添暁耕氏と決定。会長は川竹松風氏(本社・参事)

▼川柳平安53年1月号第二五〇号は柳界にとつては忘れ得ぬ出来ごととなる。あけ名門川柳平安消ゆノとだけ展望子は書いて、惜別の言葉とする。

▼短詩形文学第2号。「川柳の作風の変遷と現代的把握ー河野春三」「書評」雪と炎のうた「山村祐」は

か作品に伊丹三樹彦(青玄)時実新子(川柳展望)などがある。(頒価七百円・送料百二十円)

▼川柳展望12号(季刊)に板尾岳人(本社・常任理事)作家論がある。この執筆陣は橋高薫男、三井醉夢、森中恵美子(番傘)。56

3・01大阪府豊能町ときわ台3の4の17・天根夢草方・川柳展望事務局(価九二〇円)共

▼うみなり川柳会十五周年記念川柳大会が四月二十三日に開催されるが、加藤貞山喜寿祝賀となる(本社・理事)

▼川柳陽春号へ東野大八氏は「川柳界の一茶・須崎豆秋」を執筆。154東京

都世田谷区三軒茶屋二九九・構造出版株式会社(定価六八〇円・送料一〇〇円)

▼国鉄川柳句集(第22集)作品募集。参加資格は会員およびその家族となっている。参加料は千円。63

〇奈良市七条町六七四一宮口奈良苑(本社・理事)

▼第6回大嶋瀧明賞入選作はA賞「見送ればポールのような見合するーほか、桶渡義一」B賞「子が職を交える話をよそで聞きーは

か、藤森白水。

▼時の川柳社の第11回東洋樹川柳賞受賞者は「川柳公論」社の尾藤三柳氏に決定。この受賞式は本年5月28日に神戸市の「兵庫県福祉センター」でおこなわれる。

▼第9回奈良新聞川柳大会が3月21日午前10時から奈良文化会館2F集会室で開催。題は「椅子・火口・折

兼・席題3句。欠席投句料五百円・締切3月18日6

30奈良市北中町七一・杉野睦朗あて。

▼日本川柳協会の住居番号変更530大阪府北区中之島三丁目六一三二、大ビル六〇八片山法律事務所内日本川柳協会。

▼番傘川柳本社の新住居表示530大阪府北区西天満五丁目6-1261605号

▽同人の動向△

▼西尾菜氏(八尾市)は「川柳・陽春号」の「サヨナラ平安川柳社」へ「残念に分らぬ解放理由」と「東西南北・大阪府」を執筆。

▼尼緑之助(山雲市)も「東西南北・島根県」を執筆。

▼川村好郎氏(高石市)は

## 第一回 鳥取県川柳大会

日時 53年3月26日(日) 午前10時

会場 鳥取県福祉文化会館(倉吉市山根)倉吉駅下車徒歩八分・中央体育館横

会費 一、〇〇〇円(軽食・作品集、各題二句12時締切(厳守)兼・席題共、各題二句

知事賞ほか総合成績八位まで。採点は入選句一句一点(客・三才を上位とする)

賞出題者 兼題と選者

「栄える」河村日満選、「ふくらむ」小林由多香選、「スタート」沢車榮選「楽しい」森田布堂選、「鯛」奥谷弘朗選、「自慢」小西雄々選

席題 選者

「山田蟬々」、「両川洋々」、「石垣花子」

投票先 五百円(作品集呈)3月20日締切

投句先 682倉吉市下田中五二八一六、奥谷弘朗(電話085882①1671番

懇親会 千五百円(希望者)、3月23日までに投句先へお申し込みください。

主催 鳥取県川柳作家協会 (鳥取市相生町三の二〇四森田方)

「川柳」へ「一期一会」8句、作品を発表されてい

る。

▼山川阿茶さん(大阪市)から「生駒の霞乃先生からのお便りの中に「初夢の客は十万億土から黒板の字を消すように一人へるー菜の花に色ある夜なりそれは夢ー霞乃」の玉句がありま

した。

▼小西無鬼氏(兵庫県)の購読者倍増に感謝。

▼八木摩太郎氏(堺市)からNHKTVが「黄金の日々」で堺を舞台にして以来、堺を取材に来訪し、「女性自身」にも近く「堺の方言」が掲載されますが今年

は忙しくなりそうです。

▼浜田久米雄氏(岡山県)から「第二句碑「凡人へもつ

新 同 人 紹 介

飯塚 虎秋

高橋 可保留

縁之助・独仙―推薦

金川 満春

弘朗・布堂―推薦

柴田 恵美子

好郎・ゆきを―推薦

永井 永楽

水客・客遊子―推薦

間嶋 青丹子

水客・白溪子―推薦

籠島 総甫

牧人・小松園・一三天―推薦

たいなくも湯があふれ」が四月月上旬に久米郡久米南町弓削の川柳の小径に建つことになりました。落成式は四月十六日に同小径で行われる予定です。

▼河村日満氏(鳥取市)から一鳥取県川柳作家協会報一第一号が出来ました。

▼清水一保氏(鳥取県)から一執念の町議再選を無事成しとげ、いま静かに戦いの跡をふりかえりいろいろな感がいにくけております。

▼那須鎮彦氏(大阪市)は駒つなぎ川柳会第一回の優勝カップ「南柳賞」を獲得された。

▼椋谷漫柳改め寿馬(かずま)となる。

▼八木千代さん(米子市)の母堂でう様が九十歳で一月十三日午前一時十分に永眠。千代さんは長い間のご

看病だった。遠寿院凌花日妙大姉一若かりし日の母の手の匂いかなしー千代。

▼小出智子さん(大阪市)の義父隆吉氏が一月二十日に脳溢血で永眠。七六歳。入院三か月余日を智子さん

は不眠不休の看護につとめられた。二十一日の告別式には川柳塔社同人約二十名が参列した。

▼小林由多香氏(鳥取市)の母堂たみ様が七九歳のご高令で1月19日午後12時15分永眠された。合掌。

▼前号二賞候補作品訂正P29上段11行目「一軒だけの日の丸無風になつてくる」時末一灯氏作。

▽旅情△

▼西尾菜氏・博多全日空ホテルから日本のルーツを探る涙ぐましい健気な努力をうづけています。一邪馬台国わからぬから金にな

りー菜。

▼尼縁之助氏・出雲生活センターからいずも賞吉岡きみえさんを囲んでの新春句会の寄せ書き拝受。

▼3月の句会▲

▼菜の花句会―10日(金)夕六時から西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線八尾下車南へ徒歩約一分―会費三百円。題―鈴・桃・酒

向く―席題二題(各題五句以内)―投句は各一句毎適當な句箋。裏面に雅号・郵券

百円同封・締切当日到着限り―投句先☎581八尾市高安町北一丁目二五・大路美幸あて。

▼堺川柳会―12日六時から八木摩太郎居で開催。題―落日・深入り・仲間。

▼南海川柳会―16日六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題―救急車・大口・予想外。

▼南大阪川柳会―20日六時から松崎町三丁目大萬で開催。題―裂機・ライバル・立機。はさみ。

▼川柳東大阪―25日午後六時から東大阪市立中央公民館第二集会室で開催。題―運命、カムバック・先祖・八つ当り。席題二題(当日発表)。

齋 藤通風

一惠三朗・久志良―推薦

松 高秀峰

一三天・庸佑・奈良子―推薦

# 本社二月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

寒さにもめげずー今月も七十二氏というご出席である。このうち太茂津氏がひきいる和歌山勢が九氏。(川雑時代にもこのような記録はなかった)

平安の伊藤入仙氏。ふあうすと森田日の出氏、柴田一掬氏(天性寺時代月間賞杯を獲得された)ほか他社の方々の友情出席もあつて、二月句会にはめずらしい盛り上がりである。

選者もサービスされたか、一題あたり平均四十四、五句というにぎやかさだ。編集子も清記子もうれしい悲鳴である。

栞氏の柳話は、例によって声量はあり、歯切れはよく、とくに耳を寄せなくても聞けるのが何より楽しい。

いろんな話がミックスされていて、まず俳話、俳人などが辞典にあつて、柳話、柳人、柳話などはない。俳高柳低談がすむと柳ばなしになる。会場には明るい笑いがたどよう。

川柳「平安」社の解体を惜しまれ、ご自身も第3号の「川柳」誌に執筆されているが、

柳界あげて「平安」誌の廃刊を惜んでいることは事実である。

最後は本誌P 26「幻の邪馬台国を求めて」のお話になる。本誌を読みながら今夜の柳話を思い出していただきたい。

寿馬氏(漫柳改めカズマ)から席題の「求婚」の女性入選者三名に(天・幸・地・千万子・人・あいきの皆さん)チョコレートのプレゼントがあつた。川柳塔ならではのほほえましい句会が演出された。

この和やかムードの最後の一句、「演出」は八尾の大路美幸氏にかがやいた。酔々氏について、月間賞のカップ八尾へ行く。

(受付)児島与呂志・塩満敏・玉置重人(進行)高杉鬼遊(記録)玉置重人

出席 古方・与史・水客・紫香・滋雀・寿馬・一舟・武助・維久子・栞・敏・与呂志・重人・雀踊子・雅風・花梢・喜風・一三夫・右近・日酒の出・茂津・柳志・としよ・武雄・恒明・百酒・太茂津・柳志・としよ・武雄・和子・きみ・恵美子・夕花・としよ・形水・千寿子・幸・眉水・邦晴・誓二・幸太郎・英子・岳人・度・喜甲・涼一・宇宙太・醉升・寿美子・小松園・酔々・鬼遊・瓢太・薫風・文秋・君子・千万子・一二三・庸佑・吸江・一掬・美幸・みずほ・凡九郎・静歩・入仙・川狂子・頂留子・鎮彦・弥生・葉子。

席題「求婚」

伊藤 入仙選

深草の小将を地で行くプロポーズ 和子  
バレンタインデー百ほど買ったチョコレイト鬼遊

あわよくば求婚となれチョコレイト  
車椅子へ求婚愛はほんまもの  
椅子に深くかけて求婚考える  
求婚のよにも取れる言葉尻  
夕焼けの背に求婚のタイムリ  
身障の姉がいまずと言う求婚  
求婚が女系家族に取り巻かれ  
求婚にやつと間に合うアデランス  
求婚へ夜店の指輪とは知らず  
歯切れは悪いが求婚と思ひ込み  
求婚の覚えなどなく添いと来る  
求婚を断る知恵をかりにける  
動物園へ来て求婚を止めにする  
爪の垢キレイに洗つてから求婚  
福耳を娘の婿に探してる  
求婚の誓を盾にとる強み  
求婚の嘘嘘い合う倦怠期  
クシャミ連発求婚のムード消す  
求婚の花束はハンカチ胸にさし  
求婚の気遣とげがありそう  
墓場まで騙してほしいプロポーズ  
求婚のそれから男縛られる  
しあわせを掴みそこねたプロポーズ  
求婚も女性上位を持って余し  
キッス一つでも求婚と思ひ込み  
求婚と同時に合鍵渡される  
じれつたい言葉で求婚してくれる  
たのもしい言葉で求婚してくれ  
求婚を疑いつづけてまだ嫁かず  
求婚のチャンス逃がした俄か雨  
妹のように思われはつとかれ

好一  
美幸  
栞  
きみ  
あいき  
喜風  
太茂津  
千寿子  
柳志  
紫香  
栞  
幸  
英子  
勝美  
眉水  
与史  
庸佑  
恒明  
鬼遊  
小松園  
宇宙太  
寿美子  
涼一  
醉々  
小松園  
寿馬

一好 美栞 千あ 喜太 千柳 紫栞 幸英 勝眉 与庸 恒鬼 小寿 宇宇 寿涼 醉小 涼寿  
舟一 幸幸 美栞 千あ 喜太 千柳 紫栞 幸英 勝眉 与庸 恒鬼 小寿 宇宇 寿涼 醉小 涼寿

取れるだけ取つて求婚そらされる  
 プロポーズはなしブレイキのないふたり  
 求婚に昂奮しすぎていたパンダ  
 どちらから求婚したのかも忘れ  
 求婚の不意を衝かれたジンフィズ  
 きこらない言葉で求婚してしまい  
 50円で来た求婚20円でノーと書き  
 プロポーズ枕言葉など捨てる  
 昆虫の世界にもある求婚の儀式  
 どつちから求婚してもめる倦怠期  
 求婚をする歯科医へ走るなり  
 臆病な男で求婚してくれず  
 ずい筆で書くときれないプロポーズ  
 しどろもどろの求婚を聞く三分咲き  
 同棲のまま老人ホーム迄の縁

席題「鬼」

森田日の出選

ヒラギのとげがささつた鬼の指  
 子の為にしごきの鬼になることも  
 必勝へ心を鬼にするしごき  
 鬼になる父の涙見てしまふ  
 七人の敵へある日の鬼の面  
 北風のぬくみを知つてる冬の鬼  
 往年の舞台の鬼も汚れ役  
 仕事の鬼で通り一生趣味もなく  
 鬼不觉入歯忘れて来た下界  
 この路次の地図をもつて鬼が来る  
 裁かれる目には検事も鬼に見え  
 正直にしても極楽へ行けぬ鬼  
 飲みすぎて付け馬と言う鬼をつれ  
 三十年鬼隊長の墓も荒れ

喜明 恒水 日の出 紫香 一三夫 寿馬 雀踊子 千寿子 岳人 幸人 入仙  
 雀踊子 度 幸太郎 雀踊子 重人 美幸 幸太郎 飄太 武助 柳志 恒明 誓二 右近

不景気な鬼がひつこく居すわつて  
 手鏡の鬼を脂粉で塗りつぶし  
 倦怠期小さな鬼が棲みはじめ  
 鬼の面かぶれば好きなことが言え  
 妬心疑心女心に鬼が住む  
 立春は鬼で回つた二日酔  
 赤鬼青鬼ハーフの鬼も混じつてる  
 バイブルを逆かさに鬼が読んでいる  
 車座の焚き火へ鬼のコップ酒  
 国会を見てきた鬼が御注進  
 身の中を走らせた鬼が御注進  
 出稼ぎの鬼が人恋うわらべ唄  
 私には鬼子に育つて欲しい欲  
 神かくし鬼はにんまりして出掛け  
 デスマスク鬼のカケラがまだ残る  
 鬼の仮面を取つて社長は退社する  
 鬼の目に涙寄る年なみに負け  
 返済を迫る鬼の目と出合い  
 都会の鬼は心の中に住んでいる  
 百鬼夜行三面記事のあざやかに  
 鬼瓦旧家を守る風のなか  
 逃げ遅れた子供鬼の不信感  
 退社ベルかなぐり捨てて鬼の面  
 士へ賭ける悲願心を鬼にする  
 セールスの鬼のグラフは天を突く  
 姑に鬼と言つてしまつた過去をもち  
 人間の身勝手豆で鬼を追う  
 わが胸の鬼に問うてる明日の途  
 万巻の経の重さを鬼は負う  
 税務署に弱い男に鬼の面

涼一 一三遊 鬼酒 百酒 邦晴 凡九郎 一三夫 寿馬 敏雄 武助 小松園 夕花 涼一 一二三 度きみ 静歩 百酒 涼一 邦晴 一二三 君三 一三子 一三子 美幸 日の出

兼題「身びいき」

小浜 牧人選

身びいきの親を次第にけむたがり  
 身びいきも計算にあるアルバイト  
 身びいきに穴なぞあろう苦はない  
 身びいきに見てもこれではもてぬ顔  
 甲子園に住んで阪神ファンである  
 身びいきの妓がおつて座がしらけ  
 内の子に限つてが少年Aにする  
 身びいきないがのひと言余計なり  
 ホス猿になると身びいき始める  
 身びいきが過ぎてひ弱な子に育ち  
 雑談のなかに身びいき隠さない  
 身びいきへ香典袋は重くなる  
 身びいきの姑遠慮のない言葉  
 身びいきの少年それから迷い出す  
 身びいきの血の汚なさを意識する  
 見えすいた身びいきだから許せない  
 身びいきのふるさとの山富士に似る  
 身びいきの傘をこつそり干しておく  
 身びいきの拍手ぐらいは許される

清女 柳信 規不風 東天紅 寿美子 菜雀 吸江 寿馬 柳志 水客 岳人 弥生 好一 醉々 夕花

川柳塔社同人の胸にかがやく

シンボルバッジ

一個 千百円

(送料共)

女性用もあります。

川柳塔社



身びいきがひとりいるから和が揺れる  
 身びいきが握りつぶしてくれたミス  
 身びいきな男の語尾がはねあがる  
 身びいきと思えど上役だから聞き  
 身びいきの話に飽きたデスマスク  
 身びいきが蔭であやつる糸を引く  
 身びいきの小言に鋭いトゲがない  
 身びいきが貧乏神とも住みなれて  
 母ひとり子ひとり身びいきだつてする  
 身びいきを避ける他人の貌をもつ  
 嫁にだけ息子の過去は秘めておく  
 身びいきのふとんが寒いときもある  
 世が悪い友が悪いと子信じ  
 身びいきをする世間が狭くなる  
 再婚の連れ子をかばう言葉よる  
 身びいきに見ても末つ子たよりない  
 身びいきをするにも出来がわるすぎる  
 身びいきが守りとおしてくれる驢  
 身びいきへ孤独の影が追つてくる  
 身びいきで妻は妻なり言うてくれ  
 身びいきをしても勝てない敵がいる  
 娘に自信もちすぎ縁談またこわし  
 身びいきが受験地獄に追いやつた  
 身びいきでながれて重い荷を背負い  
 身びいきでないがあなたに賭けてみる  
 身びいきをされる案山子になつておく  
 身びいきな医者で家族を誤診する  
 身びいきをされてる方も気がつかれ  
 保育器の中で身びいき言伸する  
 実績があつて身びいき言わさない  
 身びいきをすれば眼鏡が曇り出す

弥生 赤鬼が来て赤鬼を自慢する  
 滋雀 片言の瞳が真剣に母かばう  
 水客 身びいきのプラスチックで浮き上り  
 庸佑 兼題「砂利」 岩本雀踊子選  
 吸江 目に這入るダルマの足が砂利でいる  
 和子 一日を重ねて砂利は丸くなる  
 静馬 お白洲の砂利にふるる膝頭  
 生々庵 砂利トラで稼ぎ綺麗に食べている  
 一擲 玉砂利を歩けば神の音がする  
 弥生 どれほどの旅を知つてる砂利の顔  
 英子 駅まで十分がこんなに遠い砂利を踏む  
 度 玉砂利を踏んで神前に突き当たる  
 二三 一掴み砂利に思惑などはない  
 惠美子 善人のまるさで砂利が流れつき  
 入仙 砂利舟に淀川はもう夕まける  
 あいき 玉砂利の音ご利益を疑わず  
 静馬 抵抗の限度を見せる砂の塔  
 幸馬 玉砂利をふんで懺悔を決意する  
 維久子 靖国の砂利父の声友の声  
 紫香 玉砂利を踏めば神風そよと吹き  
 みずほ 浜砂利の一つ一つがほてる夏  
 眉水 母の涙九段の砂利は知つてい  
 千寿子 ぬかるみを嘲笑うて砂利にある誇り  
 維久子 玉砂利へ歩幅かわる老夫婦  
 喜甲 あがいても所詮は砂利の一粒で  
 美幸 サクサク神に近づく砂利の音  
 邦晴 ザクザク神に近づく砂利の音  
 みずほ 砂利になる弱身をころげ落ちる砂  
 足裏に応える夫婦の砂利がある

規不風 許せない噂は砂利に埋めておく  
 美幸 砂利道になるとよろめくハイヒール  
 鬼遊 砂利ひとつ石の命を失なわぬ  
 惠美子 神前の砂利の上なら狂えない  
 夕花 天国か地獄か襪締め切られ  
 宇宙太 天国の締切りベルを夢で聞く  
 牧人 締め切り後没に出来ない投げ向くる  
 みずほ 新幹線の窓で顔去して別れ  
 いわを 締切が過ぎてやる気の筆が冴え  
 宇宙太 スランプへ締切重くのしかかる  
 重人 締切があるから動くベンがある  
 一擲 締切りが過ぎると煙草甘くなる  
 二三 蒼穹を締め切るように山と山  
 小松園 締切に殺されそうな小説家  
 寿美子 締切を守らぬ作家売れている  
 度 締切へ原稿料という手綱  
 酔升 人造湖ダム締切つた顔もせず  
 君子 締切りへ時計の針はあわてない  
 寿美子 締切りへ父のない子は走らない  
 邦晴 締切はまだです花嫁募集中  
 栗子 締切のない人生だからあわてない  
 和子 締切りの裏からもぐるコネがある  
 千乃志 天国の門に締切りなどはない  
 吸江 締切つたアからガが匂い出し  
 維久子 締切切つた筈の胸から匂う春

柳志選 本多 柳志選  
 弥生 赤鬼が来て赤鬼を自慢する  
 滋雀 片言の瞳が真剣に母かばう  
 水客 身びいきのプラスチックで浮き上り  
 庸佑 兼題「砂利」 岩本雀踊子選  
 吸江 目に這入るダルマの足が砂利でいる  
 和子 一日を重ねて砂利は丸くなる  
 静馬 お白洲の砂利にふるる膝頭  
 生々庵 砂利トラで稼ぎ綺麗に食べている  
 一擲 玉砂利を歩けば神の音がする  
 弥生 どれほどの旅を知つてる砂利の顔  
 英子 駅まで十分がこんなに遠い砂利を踏む  
 度 玉砂利を踏んで神前に突き当たる  
 二三 一掴み砂利に思惑などはない  
 惠美子 善人のまるさで砂利が流れつき  
 入仙 砂利舟に淀川はもう夕まける  
 あいき 玉砂利の音ご利益を疑わず  
 静馬 抵抗の限度を見せる砂の塔  
 幸馬 玉砂利をふんで懺悔を決意する  
 維久子 靖国の砂利父の声友の声  
 紫香 玉砂利を踏めば神風そよと吹き  
 みずほ 浜砂利の一つ一つがほてる夏  
 眉水 母の涙九段の砂利は知つてい  
 千寿子 ぬかるみを嘲笑うて砂利にある誇り  
 維久子 玉砂利へ歩幅かわる老夫婦  
 喜甲 あがいても所詮は砂利の一粒で  
 美幸 サクサク神に近づく砂利の音  
 邦晴 ザクザク神に近づく砂利の音  
 みずほ 砂利になる弱身をころげ落ちる砂  
 足裏に応える夫婦の砂利がある

締切った部屋に娘の青春がある  
 締切った心を乱す隙間風  
 締切のひとりひとりにあるいくさ  
 締切った寒婦のところに雪が降る  
 締切つて二人になつた換気扇  
 締切を一日のばす民主主義  
 締切つた後で割込む顔を持ち  
 締切つてよっしゃとポスト音をたて  
 銀行の扉三時の無表情  
 締切つていと慇懃に断られ  
 赤坂で歴史をつくる部屋を締め  
 屋も締め切つて冷い女が住み

兼題「演出」  
 大坂 形水選  
 柳 志  
 登美也  
 憂  
 柳 信  
 富 子  
 トメ子  
 東天紅  
 いわを  
 どんたく  
 静馬

川柳塔社常任理事会 (2月3日)

寒風の中、出席率がどうかと心配されたが  
 盛会だった。  
 議題は、去る1月22日の大成閣での提案さ  
 れたことに對し、あくまで慎重に検討してい  
 くことだった。(P42ご参照)  
 決定したのは「吟行の件」である。表紙の  
 2をご覧がって、早く申込んでいただかな

つくしの子可愛ゆく春を演出する  
 演出へ妻の笑顔が突き刺さる  
 演出へすねるスターの更年期  
 雪の演出天を被うて地を覆う  
 団欒の主役は演出など知らぬ  
 葬儀屋の演出上手に泣かせはる  
 ウーマンリブ平和を演出するつもり  
 演出の向うに客の顔がある  
 演出の効果なきめる鐘がなり  
 華麗なる演出闇夜の新能  
 桐一葉散らし演出家の自信  
 演出ですとハブニング受け止める  
 演出も演技もうまい涙声  
 演出をする黒幕に顔がない  
 人様の演出見てる懐ろ手  
 総会屋演出通りの手を叩き  
 演出へ無言の石が置いてある  
 無器用な演出父の温か味  
 演出の効果もここにエマニエル  
 演出の心得ている社長秘書  
 演出の壺をおさえた芸の幅

としよ  
 寿馬  
 幸太郎  
 水客  
 重人  
 一三夫  
 花梢  
 一三夫  
 紫香  
 和子  
 与史  
 幸太郎  
 柳志  
 雀踊子  
 小松園  
 一三三  
 鎮彦  
 生々庵  
 涼一  
 入仙  
 武雄

陽が昇る位置気に入らぬ演出家  
 演出をする齡でない齡でない  
 女と別れる演出はスマートに  
 演出が過ぎてはならぬ子守唄  
 演出のメガホン名優しごかれる  
 ワルツ舞う雪北風の演出か  
 どた靴も演出すれば美しい  
 演出の冴え銭湯を空にする  
 天皇の演出でない負けいくさ  
 演出へ今夜の口紅ひかえとく  
 演出にない五つ子のつかみ合い  
 露地裏に演出もない米を借る  
 演出が過ぎてビエロになっている  
 演出の一つにおとこ動かない  
 涙ぐむ父に演出などは無い  
 真赤なタイ私を演出してみよう  
 目を瞑る女の演出には負ける  
 演出のうまい妻あり軽い靴  
 演出にあらず頭を下げる鹿  
 神様の演出のまま唯歩く  
 演出家に三階席の目が恐い

(河井庸佑・整理)  
 武助  
 薫風  
 涼一  
 水客  
 敏子  
 英方  
 度方  
 古方  
 岳人  
 維久子  
 英子  
 鬼遊  
 喜甲  
 水客  
 みずほ  
 滋雀  
 美幸  
 右近  
 醉々  
 美幸  
 形水

いと定員制になっている。「業務分担」の件  
 もそれぞれお願いすることになった。  
 「婦人部復活」の件は、女性の方々とよく  
 相談しなくてはならない、今スグというわけは  
 ゆかぬようである。  
 「支部制復活」や「賛助会員復活」など、  
 一応お預りしておき、再検討することになっ  
 た。支部制復活は、それぞれ地域的に、それぞ

れの事情も考慮に入れてのことである。賛助  
 会員復活など愛社精神には頭が下がった。現  
 在、有志による「特別会費」を本社創立いら  
 い毎月いただいていることをこの際付記して  
 おく。  
 出席 古方・形水・萬的・水客・紫香・太  
 茂津・栗・柳志・生々庵・岳人・小松園・一  
 三夫(敬称略)

# 老地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳後楽三社合同句会 井上柳五郎報  
 よい顔を見せればにじりよってくる  
 美顔術他人の顔にして帰し  
 顔パスで行けるとこまで行くと云う  
 向い風まとも男の顔炎える  
 底抜けに明るく振舞い気を使い  
 底無しに投げた石にも賭がある  
 どん底に居ても希望の燈は消さず  
 海底で海女は信神気をまもり  
 金策にきれいに刺った不精髭  
 不精髭無言の抗議する構え  
 不精髭の始末が出来ぬ年になり  
 好々爺で一人暮しの無精髭  
 貧相に輪をかけている不精髭  
 設計図キツチンだけは女房決め  
 ちっばけな設計図で意なし  
 血圧をそろそろ忘れて上機嫌  
 血圧の怖さをさす医者も肥え  
 貫録がつき血圧に悩まされ  
 人形と枕を並べて娘病み  
 着飾らないけし素朴で見飽きせず  
 人形と泣く失恋の白い部屋

- 久米雄 葵丘 客遊子 胡風 辰路 照路 七面山 博友 佐加恵 元一 廉一 哲郎 正道 恒洋 宏大 草風 幽谷 ひろし 梁太 欣之

人形も埴輪にされて目をつむり  
 人形と寝る子へごめんと母帰る  
 姉嫁ぎ姉の人形の眉が濡れ  
 手作りの人形くれた遠い人  
 極楽も地獄も行かぬわしや残る  
 極楽はうわさに聞いて目に見えず  
 極楽へ遠く女は座を守り  
 極楽は美人の妻を一人占め  
 極楽の亡妻へ手紙を書きたい日  
 極楽に行きなさいよと掌を組ませ  
 タクトを信じて私は笛を吹く  
 オースケエ川柳会 大坂形水報  
 故郷からの振分け荷物は生野菜  
 野菜の値物価指数を左右する  
 ベルト締めなおして会議室へ戻り  
 不景気の明日へふんどし締め直し  
 今日までの私を捨てて明日を見る  
 アルバムに初湯をつかう僕がいた  
 アルバムにうそをつけない顔がいる  
 菜園でとれた野菜の鍋囲み  
 時間を戻しながら百練つてゆく  
 二皮のベルトに見果て覗いてる  
 空振りのパンドタも明日の風が吹く  
 新しい靴は明日へ向けて置く  
 山男のロマンはアルバムの中に  
 追い込みへベルトを堅く締め直す  
 贅沢にあらず真冬の茄子胡瓜  
 闘病の膳にトマトが赤すぎる  
 川柳しんぐう 川上大輪報  
 見本見る眼をセールスに読みとられ  
 レストラン見本と違うテキに会い

- 昌吾 三平 洋之 正一 定子 豊子 雷虎狼 雪山 秋月 柳五郎 玉水 常夢 榮一 常一 秀川 みどり 亜也子 博泉 有一 亜成 一聖 野地 弥生 形水 入仙 好郎 与郎 史郎

お歳暮の見本見てから又迷い  
 親馬鹿の見本集めて父兄会  
 裏口からカツラの見本持って去に  
 見本には心の見本現われる  
 良い事の見本へ少し照れている  
 スリッパが知ってる負けた日のリズム  
 スリッパが悲哀を知り尽くし  
 敝された試歩へスリッパぬげかかり  
 忙しい家でスリッパまで乱れ  
 日々多忙スリッパ横を向いている  
 いざという時はスリッパはいのまま  
 スリッパが並んだ中へ一人旅  
 スリッパで畳の上を子が走り  
 白足袋がスリッパを履くめでたい日  
 新婚のスリッパペアでじやれてる  
 出稼ぎの便りが延びている不安  
 先方の都合でのびている受身  
 保護色はただ生き延びるだけの嘘  
 どんぐり川柳会 谷垣史好報  
 鍋囲む七つボタンの生き残り  
 やり繰りを見せぬ妻なる鍋たぎる  
 歪にやる気をはためけるものか  
 社会鍋硬貨ばかりの派手な音  
 鍋かこむ間は夫婦気が揃い  
 空しさが煮つまつている鍋つづく  
 煮えて来た鍋追いたてる食いざかり  
 口出しをされてやる気が崩れだし  
 底巻きを締めてやる気の腰を上げ  
 鍋底景気やっばり羽田混んでいる  
 暖冬へやる気なくした冬景色  
 ボーナసు少くてやる気喪失し

- としよ 三千代 緑楼 亀一 幸子 富子 溪水 雀踊子 大輪 寿子 澄孝 若石 明花 まさ子 澄孝 弘生 武雄 好報 酔々 喜風 美幸 好郎 小松園 真砂 鎮彦 サヨ 鬼遊 吸江 岳人 颯太



やる気引き出せて教師は職に酔う  
つけ刃やる気に思わぬどじを踏み  
北風が吹くと土鍋が喋り出す

西宮北口句会

小浜牧人報

銀杏散る風の挽歌を聞く師走  
いつまでものんびり出来ぬ父となる  
指切りをしてお年玉がまられる  
法網のあとに京網が待っている  
顔見世の噂に天の情緒恋う

筆勢の強さを褒めた二重丸  
断ち切れぬ思いこまで戻り橋

流行おくれの靴とお前は強かった  
何も彼もやむやに済む年の暮  
世は師走シグナルの赤長すぎる

夫婦老いて言うこともなく年の暮  
聖菓買う今日だけの偽キリストで  
遠い郷銀杏拾いし風の中

華麗なる誤解ですすむ華燭の宴  
不景気な街をブーツが潤歩する  
気の強い母に弱気を訓される

嫁ぐ娘へ強いて笑いを見せる父

川柳東大阪

竹中肖二報

度

くずかごに紙の泣き声ためている  
あの人も言いたいことがあったやろ  
二人には思い出深い城下町

定年の職に未練は残すまい  
港町縁切り船が笛を吹く

遺影おがむ心を風が吹き抜ける  
幸運を逃がし老にもある未練

うまい字じゃないが色紙に乗っている  
小さな旅私が見付けた仏様

雅風 勝美 史好

牧人 半歩 正祐

千世子 ろ山

めぐる 政甫

八州 総甫

清川 喜久甫

伊丹 日の出

婦美子 泉女

喜甲 笑女

度 三十四

誓二 肖二

鎮彦 綾女

喜風 文秋

弘生

故郷恋し風の便りまですがり  
百度石母の素足を風が斬る  
まっすぐに風も少女も去る港  
悪筆でも母の便りはあたたかで  
魂のこもった金へ燈をともし

米寿まで生きて悪筆恥とせず  
あの人の好きな和服で逢いにゆく  
未練などないワと次の恋拾う  
寿とただ一字書く日本紙

背向けて未練は重くなるばかり  
五分の魂出そうか出すまいか  
裸で話そうあの人も苦勞人  
あの人はもう許してる電話口

鈍行に点点と曼珠沙華  
紙陳すでにいくさは始つてる  
旅馴れた顔腰据える城下町  
傘をさすしぐさに未練残す女

偽りを書くには紙が白すぎる

菜の花句会

母百句母はこんな有難し  
迷い子のハガキくたびれくたびれて  
動む手を止めて別れを惜しむなり  
瘦せた樹で生涯妻と子を愛す

人間の終焉ハガキに告げられる  
信号に歩風の足りぬ母となり  
象になり樹海の奥をじつと見る  
千匹の馬を狂わす葉書来る

竹とんぼやがて母の背越えて翔ぶ  
馬頭観音拝む馬喰はのんでいず  
日雇に見られてせつせと蟻あみ  
中ピ連に拍手をおくった母だった

高杉鬼遊報

柳宏子 醉々 美幸 雀踊子 鬼遊 柳志

あいき 凡九郎 小松園 好郎 葉郎 恒明

天笑 岳人 形水 右近 与呂志 智子

菜美 秋幸 夕花 幸生 史遊 鬼遊 弥生 醉々 雀踊子 恒明

その時は駿馬のように見られてた  
雪のせて花咲かせる枯木あり  
母と云う一字忘れた行状記  
目標へ馬の如くに走らされ  
稲妻に片肌くれてやる大樹  
やさしくとても恋しいハハの二字  
天皇の馬に平和がつづくなり  
樹に似合う花でひたすら添いつづけ

化粧舞の会 植村客遊子報

好き同志歩けば歩調リズムカル  
積立の旅費へ若さは待ちきれず  
ソロバンをはじき割引された顔  
正月を仕入れ楽しい紙袋  
パパの手も借り年末の大掃除  
割引いてみても一〇〇点やれぬ奴  
労資共不満ながら判を押す

植村客遊子報

越山 奮水 実男 葉香 岳詩 客遊子 秋月

無駄のない生活へ息がつまりそう  
大げさに驚いてやる五重まる  
人間を採点している檻の猿  
庭の中へ妻と二人の歩を合わせ  
庭石へ臉閉じれば佗と寂  
掃溜の鶴は前世の罪を負い  
一番に来て末席を動かさない  
補育器の中の動きを見て飽かず  
念仏の忘れた箇所は鐘を打ち  
好き同志歩けば歩調リズムカル

柳宏子 本蔭樺 牧人 久米雄 太茂洋 惠美子 松風 千寿子 秋月 越山

佳句地10選 (前月号から)

小西無鬼選

柳宏子 凡九郎 豊鶴 昭馬 頂留子 牧人 紀美代

救急車年末の街突走り

南大阪川柳会

中川滋雀報

紅月

おはこのない男は無口で飲んでる 万里

同郷のおはこが山や川を呼ぶ 漫柳

三味線に合わぬおはこで座を湧かし 文秋

ねぎらいの言葉にまさる瞳に出合い 好郎

夜学の子ねぎらうどん熱くする 柳宏子

ねぎらいの言葉も添えて出るお三時 一舟

見せたい角度タレントだって持ち 凡九郎

秒針で歩巾タレント計られる 雀踊子

タレントの謀反自由がほしくなり 憲祐

タレントの甘え目明きを忘れてる 滋雀

働き蜂の手帖に明日の字が埋まる 肖二

あの人のことは符号で書く手帖 千万子

先約があると手帖にことわられ 鬼遊

母の手帖生活の裏をしやべり出す 小男は小男なりの背伸びする

小男は小男なりの背伸びする 小男は小男なりの背伸びする

天国の門小男で軽く入り 酔彦

一枚の紙に無口を強いられる 君子

誤解してすねた無口に媚がある 久子

金の要る話になって黙りこみ 牧人

川柳大阪

児島与呂志報

梅漬けるコツを余生へ聞きにくる 重人

肩書の架空知らずに女墜ち 秀峰

口出しは無用女豹の派手な黒 楽々

大名行列くずす京の雨 敏

肩書のピエロは黒い手に踊り 洛醉

会わねけりや良かった義理は又借られ 雅蝶

行列へ一先ず並らびた義理は又借られ 本蔭棒

娘より薄いポーナス威厳落ち

深酒の苦しき知ってるあほんなら

売れてよし売れずよし老娼店の番

談笑の夕餉に歪つい重ね

肩書が国民不在の政治する

あほんならになつて愛隣地区に住む

肩書の並んだ名刺にだまされる

本職に負けぬ庖丁で指を切り

行列の一番前にいるマニヤ

カラオケの音痴同士が自信持ち

気がかりなまま世話をやくあほんなら

川柳たけはら

森井善居報

汚れなき色紙に鎖筆を晒す

妻病んでからの鎖が伸びたまま

札束に埋もれた男血の濁き

しあわせは飲んで唄つて柳友とい

真実の重さ双子をみごもれり

嘘のない生活晩酌少し酔え

ひとすじの道を歩いてきた自信

足のしげれじんじんと茶の香り

花嫁の方がリラックスしています

ひこうきぐも長いおひもをひっぱつて

コンパスで書いてもつれた丸になる

けちんばという世渡りもありはあり

吉日を兄はコメディアンになろう

友の噂私の心でとめておく

亡父を憶う豊さにいる野火の中

ページを捲る指がかわいてくる夜長

昔にまた返りそうで貝になるか

比呂志

希久志

佳加志

真佐志

多久志

眉水

喜醉

道子

笑風

漁人

与呂志

静水

鬼焼

洋之祐

房子

笑子

文晴

蘭幸

鈍舟

寛子

小二のり

小五愛

そのみ

菁居

敬子

貞朽

不己

政路

一節夫

べんかいをして口下手は疑われ

雑兵は夢で錦を飾るのみ

川柳わかやま

父越えてゆく新しい手綱もつ

観念をした時心の夜が明ける

純潔の晴着を着せて嫁がける

女房に手綱取られてる安堵

ワンマンの手綱にれては細過ぎる

奥さんの手綱さばきが効く家路

寡婦の手にむなし手綱握りしめ

知らぬ間に嫁が握つていた手綱

手綱締めそらさめようと一人の息子

物価高手綱細く分岐所

進学の手綱に迷うす台所

夜明け前一番磯へ勇み足

鳩がみな逃げてしまつていた夜明け

動き出す街へ地下足袋はく夜明け

徹夜した夜明けカーテンしめて寝る

もう夜明け暗夜行路を抜けぬまま

新聞少年四時の夜明けを気づくす

母ささむ音で私の夜が明ける

折りつつ一針一針娘の晴着

もう二度と晴着を着たくない少女

京都塔の会

松川杜的報

漬物石母は指紋を置いて逝く

事始め今日は名取のなかに居る

用のない喪中も師走ぜわしい

善木立社の太鼓なりになり

冬人は小さな嘘で歳を越し

かつ子

英詩

幸子

公

勇

千寿子

恒治

天彦

武雄

正博

みさお

幹夫

一義

希久志

与史

雀踊子

弘生

紀九郎

寿美数

光代

道夫

明代

潮花

笹似子

笛珠

誠史

美穂

客遊子

屋上の此処が鬼門という鳥居  
今もまだ祟りが生きていてを祓境  
祟りだと言われて故郷へ問い合わせ  
雨男一人に旅行たたられる  
まばろしの橋と思えぬ虹の色  
袴足をのぞいて頭垢を払うてくれ  
肩の頭垢払うて母性愛に負ける  
寒行が辻を曲がった音になり  
底冷えはどの程度です京の宿

南海電鉄川柳会 (大阪市)

文化祭序列の採めがうるそうて  
死んでまで序列どおりに名を呼ばれ  
到着をすれば序列のないホーム  
背の高いだけで序列の上にいる  
がむしやらに生きて序列の外にいる  
焼香の序列で遠縁思い出し  
人材をみこみ序列をこえた席  
床柱じっと見ている今日の客  
成績の序列中位と云う子供

うみなり川柳会

小林由多香報

新春に一ばん天馬に願ひ初詣で  
いつからか茶の間に嫁の座をつくり  
名石といわれるつやにふれてみる  
菓子袋空になったら子の欠伸  
飾られた馬が縁起をかつがされ  
平でよし上司の留守のあみだくじ  
北国の恋追う霧笛が泣いている  
テレビも見夫婦げんかもする茶の間  
輝いた武勲金鶏と共に観せ  
手袋の中でダイヤが不服そう  
茶の間から一人抜けてる受験の子

杜的 飛鳥 よし鳥 求芽 弘三 白溪子 水客 紫香 和友 辻圭水報 摩天郎 圭水 柳信 ミツエ 維久子 宏水 昌子 勝美 正和 雄人 葉士人 熊生 富美子 美智子 天人 天涯 正 笑王 おさむ 無笑人

マニキュアのダイヤがキラ何か問ひ  
お正月茶の間にそろう孫のかす  
新春の路地からスルメの香が流れ  
茶の間から娘よく食べよく喋る  
再起する腫キラキラ遅しい  
ミノ虫の袋不況に遠く揺れ  
目の出ない床のだるまがねめつける  
茶の間のて組閣人事に花が咲き  
家計簿をしめて茶の間の灯が消され  
倉吉打吹川柳会 奥谷弘朗報

神妙な顔で意見を聞きながし  
子の意見入れて明るい家庭の灯  
対立の意見言葉に棘を持つ  
姑の意見をまるく受けておき  
前向きな意見が議事をくつがえし  
貸す前に一言意見聞かされる  
新聞のインクの匂いで朝になる  
腹案をもう新聞がさわぎ出し  
頂上の楽しみ一歩一歩踏み  
へそ曲り人の歩かぬ坂を行く  
下り坂あると聞いたら平を行く  
坂道で一息ついて連れを待ち  
人更の幾帳越えて木の葉髪  
今更に転職利かぬ坂のふり  
算数が苦手漫画をよみふけり  
鳩笛は手作りの声出して暗き  
スピーチが苦手やっぱりとちり出し  
寄せ書きに苦手な筆の一句添え  
母の打つうどんの味が懐しい  
岸和田川柳会 植山武助報

舟宏 とみ枝 とし江 夕路 豊生 洋々 貞山 辰春 由多香 弘朗 陳者 夕路 由多香 雄々 春稍 弘朗 独歩 たつみ 嘉子 虎秋 観洋 節枝 寿満湖 車楽 日満 おさむ みどり 寿朗 律子 ひで

いわし雲望郷の念かり立てる  
変更をせず三浪の年が暮れ  
酒の席お茶に変更して終り  
本当の味方がついているゆとり  
チャップリンは次の閻魔を笑わず気  
する事がまだありそうな大晦日  
松の内二言目には酒のこと  
新年を迎え願想延び悩む  
初春の誓い根性群を抜き  
お年玉の予約うれしき孫の数  
馬車馬のように生きてた一代記  
犬小屋の方位暦を出して決め  
信じない心で暦見る矛盾  
暦には大凶とある好きな人  
川口弘生報

敬 敬 富み 右近 喜代子 千子 一休 三十四 漫柳 満津子 美智子 ハルエ 弘生 恒治 ますえ 道子

駒つなぎ句会 (大阪市)

岸南柳報

お人好し尻に敷かれて平和です  
溝泥を浚う刑事の目が光る

縄文の土器を守った泥も添え  
山道の泥持ち帰る登山靴

泥いじり生計を立て叙勲され  
ご機嫌な孫へ叱れぬ泥遊び

泥んこになって恋猫帰って来  
甲子園泥にまみれて踏むベース

ふる里の土踏めるのも母がいる  
泥んこの子供立たせるコマージュ

泥んこが戻って我が家らしくなり  
泥んこの坊や出てくるコマージュ

泥と今日心中しそくにダンブカー  
泥水の中にも仏の花が咲き

泥臭いことも言わねば生きられず  
泥んこになる日もあろう母子手帖

泥つけて一等賞の子が帰り  
泥人形民芸のぬくさを持っている

更生へ泥のおいははねかえし  
泥田には仲間外れの鶴が降り

和歌山七面句会

中筋三幸報

嫁ぐ日の鯛に豊かな海がある  
くさっても鯛とうそぶく貧しさや

鯛寿しに入歯鳴らして歯を落す  
孫生れ祖父母は鯛持ち初対面

養殖の鯛で大きき良く揃い  
極楽から帰ると妻の地獄責め

極楽へ未だいけそうもない初みくじ  
連休へもうごくらく行きの切符買

極楽へ行く人この世でもてぬ人  
極楽へすぐ行けそうな童話です

極楽ゆき予約のような寺の寄附  
極楽は人も獣も呆けており

白痴美の女にあくびうつされる  
手もあごもはずれんばかりの大あくび

欠伸した丈で初孫騒がれる  
大欠伸猫が見あげておりました

妻はもう欠伸をしても隠さない  
妻のグチ欠伸もせず聞ける年

川柳高知

母の日記に私と同じ母がいる  
働けるよるこびに購う作業服

不眠症いよいよ長い秋の夜  
鏡台へ仮面を脱いだ肩が落ち

独身を通す男にある噂  
独身の自画像ビエロかも知れず

神さまへ嘘のない顔手を合せ  
軽四で神さま通る秋祭り

祝福をされて独身寮を出る  
新道の幅仇となる事故の数

バス停で足踏みしている寒い朝  
乳のます胸の寒さを口にせず

暖冬も節走となれば寒い朝  
逆境に育ち寒さを口にせず

肉断の結果待つ身に寒い椅子  
肉身にそむき上野の寒い風

寒々と外には何もない葦辺  
梅便り寒さの中へ春が来る

三井ヶ丘川柳会

高田博泉報

智水庵

三幸

武雄

昌三郎

富子

宣子

淳子

和史

宏

美和子

宣枝

紅野

菊雨

節翠

秋子

麗子

紀人

朱坊

恭州

海風

広十

芽子

雅子

星雨

美江

豊栄

十面

松風

「川柳展望」20題句会

と き 3月26日(日) 午前10時開場  
と ころ 名古屋市博物館・名古屋市瑞穂  
区瑞穂通二丁目(地下鉄東山線  
今池下車・バス博物館下車)

宿題

選者

「男」 天根 夢草 (大阪)

「土」 保木 寿 (京都)

「樹」 藤川 良子 (倉敷)

「情け」 墨田 三郎 (宮)

「踏む」 住田 作二 (米子)

「煙」 ウオミ タカコ (津)

「風」 定金 冬二 (富田林)

「紙」 桑野 晶子 (北海道)

「雨」 中尾 藻介 (京都)

「旗」 淡路 放生 (丸亀)

「花」 中村 土美 (横浜)

「貨車」 窪田 久美 (横浜)

「仏」 佐藤 岳俊 (岩手)

「窓」 高田 寄生木 (青森)

「紫」 森中 惠美子 (撰津)

「姫」 橘高 薫風 (豊中)

「港」 奥田 都指王 (広島)

「緑」 早良 田都 (福岡)

「いのち」 佐藤 青旗 (名古屋)

\*各題2句・席題1題(欠席投句辞退)

\*各秀吟一句・総合10位まで呈賞

\*会費千円(懇親宴は別に四千円)

澄んだ瞳に札束などは見ない馬  
人生の流れを変える当りくじ  
ポケットに入らぬくらい医者はおくれ  
化かされた木の葉に見えるはずれくじ  
除夜の鐘終えて天馬の手綱締め  
宝くじ売って人の無表情  
真っ直ぐに進むしかない駄馬の路  
目を伏せて馬は荷車曳いて去る  
天駆ける白馬をベッドの窓にみる  
当ってもよしはずれでもよし宝くじ  
円高へ特効薬もなく暮れる  
そこで止めとけば葉になる酒だ  
脚光の馬笑ってするスポーツ紙  
競争を離れた馬は肥えてくる  
年賀状どの馬も器量よし  
ポックリポックリ馬の蹄にあつた私語  
はずれ馬券冬の素顔を見てしまふ  
落魄はしてもサラブレッドという毛並  
宝くじの列へ師走の風が吹く  
内職の一日分を宝くじ  
クジを買う列で赤旗誌んでいる  
胃腸にも風邪にも母の梅酒効く  
それぞれ思い夫婦でくじを買う  
キャリヤの不足を馬に見抜かれる  
宝くじの列凡人の顔並ぶ  
天罰とあきらめ苦いくすりのむ

まるべに川柳会

村田颯太郎

悪筆の告白だから信じたい  
うどん屋を出て後味がプンと来る  
不景気に拍車をかけている暖冬  
準備完了それから何やら落ちつかず

漫柳 光夫 明茶 洋生 弘生 琴音 珣成 博泉 美幸 新之助 恵美子 度子 三千子 凡九郎 静歩 珣鈍 あいき 右近 珠笑 ベ女 小路 柳宏子 英比古 牧人 牧人 道子 幸子 弘子

忘年会まずは風呂場でリハーサル  
倒産の理由に暖冬異変あげ  
後味が逃げそうだからしやべらない  
成人式袋衣袋も並んで居  
つくづくと生きてる喜び知る夕日  
再検診と言われてからの胃のもたれ  
エゴとエゴむき出しにして和が乱れ  
虹川柳倶楽部(唐津市) 新岡回天子  
女の子もう父さんと湯を嫌い  
馬鹿騒ぎやめて静かに聖夜の灯  
一つがいますべてのしぐさ籠の鳥  
傘もつて行かぬで妻子朝をもめ  
その一言古老の誇り削いでいる  
生捕りの蛸はくねくね拗ねている  
祝言に拍子が鳴ってかくし芸  
二百海里出来て見知らぬ魚が殖え  
鶯や梅咲かぬま初名のり  
鯨尺知らず暗着の娘も二十才  
一病を持って無理せず長く生き  
初風呂に古稀の素肌を撫でて見る  
賀状一つそれから住所わかるなり  
川柳ささやま 河原みのる報

和子 茂児 満津子 星斗 寿子 立児 頼太 五木 広坊 実光 岩治 掬中 志郎 一竿 紫浪 竜朴 久隆 虹汀 回天子

昭和53年度・紋太賞・ふあうすと年間賞  
川柳大会 | 4月2日(日) 11時開場  
会場 兵庫県福祉センター3F(神戸市葺合区坂口通2丁目1) 18  
兼題 「流れる」(広島) 谷口幹男選  
「抱く」(豊中) 三浦宏選  
「手帳」(倉敷) 岩井三窓選  
「錯」(中好啓選 田中好啓選  
「印象」(八尾) 西尾葉選  
「溢れる」(神戸) 三条東洋樹選  
「炎」(福岡) 泉 淳夫選  
各題2句・席題なし・(欠席投句辞退) 出句締切13時  
賞費 千円(記念品・昼食呈)  
員長賞・他  
終了 16時30分の予定  
主催 ふあうすと川柳社

\*川柳公論三周年記念誌上競吟会  
\*課題「大地」十人選  
\*選者—斎藤大雄(さつぼろ) 宮川絢市(杜人) 岸本吟一(番傘) 佐藤正敏(川柳研究) 大野風柳(柳都) 佐藤青旗(緑時実新子(川柳展望) 橘高薫風(川柳塔吉岡竜城(噴煙) 尾藤三柳(川柳公論)  
\*一章提出(未発表作品) 締切3月31日  
\*会費千円(発表誌呈) 最優秀句一万円呈  
東京都北区栄町38-2 川柳公論社

・募 集・

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞選  
 水煙抄 (10句) 正本 水客選  
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風選  
 課題吟 (各題5句以内)

「こども」 石垣 花子選  
 「茶摘み」 井阪 東天紅選  
 「柏餅」 阿部 柳太選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
 ★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞選  
 水煙抄 (10句) 正本 水客選  
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風選  
 課題吟 (各題5句以内)

「梅雨」 森田 カズエ選  
 「定刻」 森田 布堂選  
 「アルバム」 藤井 春日選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

4月の本社句会は7日6時から

定価 四百円 (送料29円)  
 半年分 二千五百円 (送料共)  
 一年分 四千八百円 (送料共)  
 昭和五十三年三月二十五日印刷  
 昭和五十三年三月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地  
 編集兼 中島蓬太郎  
 発行人 藤原童心社  
 印刷所 藤原童心社  
 郵便番号 542

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地  
 発行所 川柳塔社  
 電話 大阪・二七一―三九八五番  
 振替口座 大阪・三三三六八番

本社三月句会

日時 三月七日 (火) 午後六時  
 会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地  
 電話 271・3935番

兼題 「友情」 戸田古方選  
 「寿司」 高杉鬼遊選  
 「後ろ指」 野村太茂津選  
 「ちぐはぐ」 黒川紫香選  
 菊沢小松園選  
 各題三句以内敵守

席題 二題 当日発表  
 会費 三百円  
 ★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
 大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

4月の兼題 「金髪」 「暴走」  
 「花盛り」 「小説」

3月の常任理事会は3日5時から

何を選んでいただくかは先様におねがいして  
 タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にく  
 い贈物かと存じます

一〇〇〇円から  
 一〇〇〇〇円迄  
 大阪・東京・京都  
 3店に共通です

高島屋  
 ば本橋条  
 大阪・日四  
 東京・京部

## ・ペン・ペン草・

次号から選者交代  
★四月号から「同人吟」は西尾葉氏。「水煙抄」は正本水客氏の初登場となる。「愛染帖」は橋高薫風氏で変わらず。生々庵主幹や小松園氏の一年間のご心労は大変なことだったとお察し申しあげる。

伊藤入仙氏に会う  
★二月中旬の帰りに、形水氏に連れられて、「平安」の伊藤入仙氏と心齋橋でコ―ヒ―を一緒にした。解散

## 肉体疲労時の ビタミンB<sub>1</sub>補給に

# アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも  
☆アリナミンA 25ミリ錠のほかに5ミリ錠



の野次馬根性でついて行ったのではなく、福永清造先生や入仙氏には「漫才」まで、田漫才から復活漫才まで、購読いただいていたので、いわばお得意先きだったからである。ほくはうちの小集にも顔を出さないくらいだから、他社の大会にも出席したことがない。だからゼン顔が売れていないわけだ。しかし妙なもので、入仙氏が句会場へは行ってこれた途端、旧知の人に会ったように、期せずして双方笑顔で「ヤア」「ヤア」とあいさつを交わしたことである。言葉を変えたことでも、その日が最初だったのに、川柳は川柳に通じるといふものなのだろうか。

い顔を感じるほど頭はよくないから、ほんとに不思議な初対面であった。  
★句会の前日に、ある雑誌社の記者と、やはり心齋橋の喫茶店で会ったが、その時も、先方さんから、いきなり「初めまして」と声をかけられた。故秋田先生のことを聞かされたため、ほくに会いに来たのだが、何を見てほくとわかったのか。「こんな場合、いつものヒガムのだが、ほくの人はあまりよくないので、ほくの特徴を教える人が「小柄で人相の悪いヤツを探がせ」とア

ドバイスするのだろうか。  
★そうすると、入仙氏には形水氏も、そんなことを吹きこまれたのではないか。とおもっている。

### 廃刊の真情

★福永清造先生に「漫才」の廃刊で、お預りあげたことだが、受けとったというご返事の中で「平安」も廃刊するが、本が消えるというさびしさは、舌筆にいうくせないものがある。とあった。ほくは「秋田先生に殉死」または古いことばだが「断腸のおもい」という言葉を使ったが、そんな生まやましいものではない。  
★秋田先生が亡くなった、すでに半歳以上経って今日でも、新聞社や各方面から「再刊する決心がついたか？」という励ましがあとを断たない。ほくにしてみれば、先生の追悼号は芸能界の歴史的名ものであるといわれたので、よい決心がつきにくくなった。秋田先生の名の遺産である漫才の「詰名」を汚がしたくないからだ。

であろう。よくわかるような気がする。入仙氏は送本の目ご自分の車で郵便局へ運ばれるのをふられたが、直接「雑誌に手をふれない人」は、この雑誌愛というものは分かってもらえないことである。毎月雑誌が出来ることに、わが子の誕生と同じ愛着がわくものである。

入仙氏のお話を聞いて、最も感動したのは、氏は京都にいたの柳社には属さなかったそうである。郷土愛というのであろうか。作家の藤沢桓夫先生や、秋田實先生は大阪から一歩も出られなかったが、京都にも入仙氏のような気骨ある柳士のおられたことは、最近にない佳話として、心あたまるものを感じたことである。

### 全璧の女性柳人

★スペースの都合で、ところどころチョンビった拙文だが、柳原静香さんと北野久子さんにご登場願った。三月号は女性柳人にページを飾ってもらっているが、静香さんや久子さんにあったかき手をさしのべている智子さんや君子さんの友情は美しい(不二田一三夫)

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

# 南海サービスチェーン

◁ホテル・旅館▷

- |                 |           |   |                 |         |   |
|-----------------|-----------|---|-----------------|---------|---|
| ◆白浜温泉<br>国際観光旅館 | 朝         | 日 | ◆徳島鳴門<br>国際観光旅館 | 鳴       | 門 |
| 国際観光ホテル         | ホテルパシフィック |   | 国際観光旅館          | 鳴門公園ホテル |   |
| ◆勝浦温泉<br>国際観光旅館 | 中         | の | ◆紀北橋本<br>観光旅館   | 紀       | の |
|                 | 島         |   | 観光旅館            | 川の川苑    | 苑 |
| ◆湯峰温泉<br>国際観光旅館 | 湯         | の | ◆泉南淡輪海岸<br>観光旅館 | 淡       | の |
|                 | 峯         | 荘 | 観光旅館            | 輪の輪苑    | 苑 |
| ◆新和歌浦<br>国際観光旅館 | 萬         | 波 | ◆大阪なんば          | ホテル南海   |   |

お問合せ・お申込み 南海交通社  
 日本交通公社・サービスチェーン  
 大阪案内所 06-(631)-0222



**南海電鉄**

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ  
**豚饅・焼餃子**  
 しゅうまい ちやあしゅうまん  
**焼売・叉焼饅**

大阪・なんば



TEL (641) 0551

〔支店・出張店〕

なんば高島屋 心齋橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋  
 中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店  
 ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア  
 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店)